
魔法少女リリカルなのは ~ とある兄妹の転生記 ~

tk

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは ～とある兄妹の転生記～

【Nコード】

N8681L

【作者名】

tk

【あらすじ】

兄妹で転生しちゃった？！

転生先はリリカルなのはの世界

天使からもらった能力を使って原作ブレイク！！

文才は無いですが頑張っていきます

感想などもお待ちしております

0話 プロローグ・・・なのか？（前書き）

この小説はチートオリ主の二次創作です

二次創作などが不快の方は「戻る」ボタンを押してお戻りください

0話 プロローグ・・・なのかな？

俺たちはずっと一緒だった

一緒に生れ、一緒に生活し、一緒にアニメを見て、一緒にゲームをして・・・

最終的には、一緒に死ぬことになった

優奈が強盗に襲われ、おれも反撃しようとしたが子供の俺が大の大人に勝てるはずもなく・・・

気がついたら、俺は妹の優奈と一緒に白い世界にいた
そして目の前には天使が・・・

「俺たち、死んだのか」

「そうですね、いわゆる死亡フラグとかいうやつです」

「お兄ちゃん、あの人？なんか俗物っぽいね」

「あの世では下界の娯楽が色々ありますので」

あの世は随分と俗物らしい

そんなことを考えていると恐る恐る天使が、

「あの〜、実は転生してもらおうことになるんですが・・・」

「へっ・・・？」

「実は、こちらの手違いで強盗が入るのは隣の家だったんですよ」

「じゃあ、俺たちは本当は死ななかつたよ？」

元の世界にも戻れないのか？」

「あんな惨殺死体に戻る気ですか？」

だから、転生してもらおうという風になったんです

どこか転生したい世界はありますか？」

「お兄ちゃん、どうする？」

私は、お兄ちゃんがいたらどこでもいいよ？」

「そうだな、じゃあアニメの世界とかでも行けるんですか？」

「ええ、貴方の知っている原作の並行世界なので問題ありませんよ」

「じゃあ、リリカルなのは世界でお願いします」

「分りました」

じゃあ、これもテンプレという事で願い事を3つずつ叶えてあげますよ」

「じゃあ、まずは俺から」

一つ目は、身体能力の強化

二つ目は、俺が知っているゲームやアニメの能力が使える

三つ目は、デバイスがほしい」

まあ、こんなもんだろう

次は、優奈の番だな

どんな事言う気だろうか？

なぜか知らんが、物凄く不安になってくる

具体的には、背筋が寒くなるぐらい・・・

「じゃあ、今度は私の番ですね

え〜と、一つ目はお兄ちゃんと同じく身体能力強化で、

二つ目は、アカシックレコード世界の記憶が使えるようになる事、

三つ目は、アカシックレコードが使えることを補佐してくれるデバイスがほしい

うん、これぐらいかなあ」

アカシックレコードとか、俺思いつかなかったぞ

・・・優奈・・・恐ろしい娘・・・

「じゃあ、おまけで二人の魔力をSSぐらいにしておきますよ

じゃあ、逝ってらっしい」

そう言うと、天使はパチンと指を鳴らした
下を向くと、真っ黒な穴が……

「覚えてろよ（なさいよ）~~~~~」

と天使に叫びながら俺たちは落ちて行った

0話 プロローグ・・・なのか？（後書き）

というわけで、魔法少女リリカルなのは ～とある兄妹の転生記～
始まりました

不定期更新ですが、頑張っていきたいと思います

それでは、次回「1話 海鳴へGO!」

1話 海鳴へGO！（前書き）

タイトルの割にはあまり進めませんでした

では、じいじー…！

1話 海鳴へGO！

Side 恭介

「ここが、海鳴か…」

転生したという実感がようやく湧いてくる

どうやら、無印開始より少し前に転生したようだ

今は、後のなのが魔法の練習をする桜台登山道にいる

とりあえず、これからのこと考えるのとデバイスや能力の確認をしないとな

まずは結界か…

「封時結界…発動！」

世界から空間が切り取られていく

うん、とりあえずはこれで気づかれないだろう

まだこの時期だったらなのは魔法少女になってないだろうしな

「まずは、能力の確認っと…」

「優奈、俺からやるぞ？」

「いいよ」

「じゃあ、トレース・オン同調、開始」

肉体年齢：9歳

魔力：SS

身体能力：正常（生前よりはかなり強化されている）

稀少技能：異能復元

（知っているゲーム・アニメの能力が使うことができる）

「まあ、こんなもんか
士郎の能力使えてるし能力は稀少技能扱いだけどまあ大丈夫だろ
う」

「じゃあ、次は私の番ね

お兄ちゃん、私にもそれ使って大丈夫か見て？」

「分かった、行くぞ！

同調、開始」

肉体年齢：9歳

魔力：SS

身体能力：正常（生前よりはかなり強化されている）

稀少技能：アカシックレコード世界の記憶

（アカシックレコード世界の記憶を読み取り使うことができる）

「うん、大丈夫そうだな

ただ、デバイス使って世界の記憶を一回使ったほうがいいのかも知
れんな」

「どうして??」

「どれくらい脳に負担が掛かるか分かったもんじゃないからな

場合によっては、制限する必要があるし」

「じゃあ、デバイスを設定しないとね」

デバイスは天使に落とされて気がついたとき、足もとに落ちていた
のだ

俺はブレスレット型のインテリジェントデバイスで、優奈は魔導書
型ストレージデバイスだ
まず俺から起動させてみる

『Call me my name.』

と、女性の声がする
初期設定もやってないようなので、まず名前を決めなければなら
ないようだ

「名前か……」

「じゃあ、アルト……お前はアルトだ」

あと、日本語で頼む」

『分りました」

マスター 林恭介

正式名称、アルト……承認

これからよろしく頼みますね、マスター』

「ああ、よろしく頼む」

「次は、私の番ですね」

『起源の書、起動を確認しました

マスター 林優奈

管制人格を起動します』

その声とともに、17歳ぐらいの銀髪碧眼の女性が現れた

「主、私が起源の書の管制人格です」

「名前はないの？」

「起動されたばかりなので、まだ名前はありません」

「じゃあ、私が決めるね！

貴女は……ルーア……ルーアね！」

「分りました」

これからよろしく頼みます」

こうして俺たちは、対面を済ませた

1話 海鳴へGO！（後書き）

能力解説は次回にします

あと、プロフィールも次回に載せる予定です

では、「2話 能力解説&プロフ公開」

2話 能力解説&プロフ公開(前書き)

やっと原作キャラが登場です

ただ、少しだけです……

あとがきで、プロフ公開などをします

では、どうぞ!!

2話 能力解説&プロフ公開

Side 恭介

「さて、デバイスの起動も無事終わったことだし、
優奈一回能力使ってみてくれるか？」

「わかったよ

ルーア、補佐をよろしくね！」

「分かりました

ユニゾンする必要があります」

「うん、行くよルーア

「ユニゾン・イン」

ルーアが光の玉になって優奈の胸に飛び込んでいく

ユニゾンが完了すると優奈の髪は黒だったのが白色になり、
眼は綺麗な蒼色になった

Side 優奈

「じゃあ、いくよルーア

リンク
接続
アクセス
参照

アカシックレコード
世界の記憶

アルハザード
忘れ去られし壊れた理想郷

『リンク接続 正常範囲

アクセス参照時に情報量の制限開始…

参照に対して起源の書に書き込みが行われます』

「うっ……くっ……」

私の頭の中を、物凄い情報量が駆け抜けていく

私の脳を経由して起源の書に書き込んでいるので、物凄く負担が大
きい

それでも、起源の書に書き込んでいるだけましなほうなのだ

世界の記憶は私の稀少技能なので、直接起源の書に書き込むことが
できないのだ

脳に負担がかかり、時間が遅く感じられ、体中から汗が噴き出て、
立っているのも辛くなってくる

「優奈！もう止める！！」

お兄ちゃんが制止する声が聞こえてくる

思わず倒れそうになったのを咄嗟にお兄ちゃんが支えてくれる

『主、恭介様の言う通り、これ以上の接続は危険です』

「くっ………わかった

リンクカット接続切断

「

脳の負担が一気に消え、汗が止まりかなり楽になる

お兄ちゃんが私をそっと抱えて、ベンチに横に寝かせてくれる

ちなみに、お兄ちゃんの膝枕つきだ

私は、嬉しいからいいんだけど絶対無意識だと思っただよなあ…

「これは…かなりきついよ…」

「そうだな、使いどころを考えないといけないな

今だって、書き込んでいたのは10秒ちよつとだったぞ？」

「ええ〜」

あれだけ長く感じられたのに、やっぱり少しずつ慣れる必要があるなあ…

あ、とりあえず…「ユニゾン・アウト」「

優奈はユニゾン・アウトをすると体を起してベンチに座り直し、起源の書を開いた

二人で起源の書を見ながらこれからのことを考える

「うーん、アルハザートって言ってもやっぱりエグいのが多いねえ…

さすが遠い昔に滅んだだけはあるね

お兄ちゃん、見てよ

これなんて、死者蘇生じゃなくてネクロマンサーの真似事だよ？

「？」

「うわ、これはやばい…

なんかStrikersでスカリエッツィがあんな性格だったのも頷けるな」

結局、起源の書に書き込まれた内容には死者蘇生に関するものは見づからなかった

このまま考えていても仕方がないので、街の方に行くことになった

Side 恭介

結界を解除し街に向かっていている途中、いきなり優奈が大声をあげた

「あっ………」

「優奈、どうしたんだいきなり大声出して」

「お兄ちゃん、私たち戸籍とか家とかどうなってるんだろっ……」

そう優奈に言われ、今更ながら俺はそのことを思い出した

俺一人なら、別に何とでもなりそうなのだが優奈がいる

そんな事を考えながら、街をぶらついていると一人の少女が目に入った

「お兄ちゃん、あの子……」

優奈もその子の存在に気がついたようだ

少女は車いすに乗りながら急な坂道が登れないようで困っているようだ

しかし、少女は困っているにもかかわらず、周りの人達はそこにま
るで人がいないかのようにその少女
八神はやての傍を通り
過ぎていく

「認識阻害の結果がかけられているようだな

だから、魔力を持たない一般人には認識されずにいるのか…」

このまま素通りするっていうのも気が引けるし、ここは手伝うか

この後どう転ぶかはその時次第だろうし、やらない善よりやる偽善だ

「優奈、さっそく介入するぞ」

「うん、このままほっとけないしね」

優奈も同じような考えだったようだ、さすが双子相手の考えることがよくわかる

俺は、困っている様子のはやてに声をかける

「どうしたんですか??」

「あ、坂がきつくて登れないんです」

「じゃあ、俺が押していきましょう」

構わないですか？」

「ありがとうございます」

私、八神はやてって言います」

「俺は林恭介、でこっちが妹の優奈だ」

「よろしくね、はやてちゃん」

その後も俺たちは色々と話した

はやての両親がいないことや、足が悪くて学校にも行けないこと……

俺たちも、両親が（この世界には）いないと言つとだいぶ親近感を
持ってもらえたようだ

俺たちが、行くあての無いということもつい口を滑らせ話してしま
った

「はやて、本当に泊って行ってもいいのか??」

そう、行くあてが無いといつたらはやては、

「家に泊まっつていつでもええよ」

と言ってくれたのだ

さすがに断ろうとしたが、行くあての無いことも確かだしそのまま
お邪魔することになった

これが、俺たち兄妹とはやてとの出会いであった

2話 能力解説&プロフィール公開（後書き）

まずは、恭介のプロフィールから

名前：林 恭介

年齢：9歳

性別：男

身長：140cm

体重：25kg

容姿：優奈にそっくり

髪は黒で背中まで伸ばして普段はポニーテールで纏めている

女顔

趣味：読書、アニメ鑑賞、ゲーム

好きなもの：甘いもの、優奈

嫌いなもの：理不尽な力、優奈を傷つける奴

魔導師ランク：なし（魔力はSS）

稀少技能：異能復元

使用デバイス：インテリジェントデバイス アルト

使用術式：ミッドチルダ式

稀少技能：異能復元

知っているゲーム・アニメの能力が使える

デバイス詳細

インテリジェントデバイス アルト

天使が作り上げたデバイス

待機状態はブレスレット型

変形機構・カードリッジシステム搭載

お次は優奈

名前：林 優奈

年齢：9歳

性別：女

身長：130cm

体重：禁則事項です

3サイズ： / /

容姿：髪は黒で腰まで伸ばしている

恭介にそっくり（どちらかと言うと恭介が優奈に近い）

趣味：お兄ちゃん、アニメ鑑賞、ゲーム

好きなもの：甘いもの、お兄ちゃん

嫌いなもの：理不尽な暴力、お兄ちゃんを傷つける奴

魔導師ランク：なし（魔力はSS）

稀少技能：アカシックレコード世界の記憶

使用デバイス：魔導書型ストレージデバイス 起源の書

ユニゾンデバイス ルーア

使用術式：ミッドチルダ式、古代ベルカ式など

稀少技能：世界の記憶

世界の記憶を読み取り使うことができる

デバイス詳細

魔導書型ストレージデバイス 起源の書

天使が作り上げたデバイス

世界の記憶を使用した際に、情報を書き込んでおける

また、書き込んだ情報は起源の書を起動して使用することができる

管制人格はルーア

ユニゾンデバイスとして優奈の補佐をする

基本アウトフレームだが、認識阻害により見えなくなっている

今のところこんなものです

書いていて、物凄くシスコン& amp; プラコンになってしまった

では、次回「3話 八神家の日常」

3話 八神家の日常(前書き)

今回から無印編突入です

では、どござー！

3話 八神家の日常

Side 恭介

八神家の日常は、朝の俺と優奈の鍛錬から始まる

庭に出て結界を張り、俺と優奈は毎日模擬戦をしている

模擬戦が終わった後は、俺はアルトと共に魔力制御と魔力の変換効率を鍛えている

また、異能復元を使って常に無限の剣製・王の財宝・対魔力C・直感C・非殺傷設定付加をつけている

この能力は、何でもかんでも一気につけることはできなく、能力のランクが高くなるごとに負担も大きくなる

そのため、負担に慣れるために常に能力をつけているのだ

転生した最初は、無限の剣製をつけるだけでかなりの負担だったんだが、

訓練していくうちによつやく今は5つ常につけることができるようになった

優奈は、ルーアと一緒に世界の記憶を使い、起源の書に情報を書き込む作業をしている

これは、多大な情報量に優奈が慣れるためと起源の書に書き込むこ

とで、

同じ情報をアクセスするときにタイムロス無くすためだ

世界の記憶で扱う情報量は常に均一ではなく、珍しい情報や失われた情報は情報量が大きい

そのため、今は慣らしということでも無限書庫や管理局にアクセスしているのだ

管理局にアクセスといっても、ハッキングに近いが…

こうして毎日、2〜3時間ほど朝に訓練をしているのだ

訓練が終わると、シャワーを浴び優奈とはやては朝食の準備にかかる
朝食を食べ終わると、俺は部屋で能力の訓練、優奈とはやては図書館に行ったりしている

昼は俺が作り、午後もみんなゴロゴロしたり本を読んだりしている

夕食ははやてと優奈が毎日交互に作っている

まあ、そんな平和な日常だ

いつかはその日常は壊れる、その事を心に刻みそれでも平和を享受する

俺たち兄妹が、八神家に訪れて数週間が経ったある日のこと

優奈と図書館に行っていたはやてが帰ってきて、

「なあ恭介君、こんなもん捨てんけど……」

持って帰ってしもたけど、やっぱり交番に届けた方がええかなあ」

と言って、ジュエルシードを渡して来た

おいおい、もうジュエルシードばら撒かれたのかよ……」

とりあえず、封印してどう介入するか優奈と相談しなきゃな

「ああ、はやて

そのの落とし主知り合いだから、俺が渡しといてやるよ」

「ほんま、じゃあお願いなあ」

「あれ、そういえば優奈は一緒じゃないのか？」

「優奈ちゃんは、途中で別れたよ？」

なんでも、夕飯の食材買いに行くとか言うったで？」

「そうか、ありがとうはやて」

そう言って俺は、自分の部屋に戻って念話で優奈を呼び出す

この前に、基本的な魔法は二人とも習得したのだ

《優奈、聞こえるか??》

はやてが、ジュエルシードを持って帰って来た》

《うん??お兄ちゃん??》

私も今、ジュエルシード一つ確保したんだけど、ちょっと不味い事になっててね…

今海鳴臨海公園なんだけど、今からこっちに来てもらえるかな？

あと、そっちじゃ魔法関係話せないし…》

《分かった、すぐに行く》

優奈との念話を切ると、リビングにいるはやてに少し出かけてくることを伝えると公園に向かって走り出した

Side 優奈

お兄ちゃんから念話がる少し前のこと……

公園の中を歩いていると、草むらの中が何か光った気がしたので、何かと思って拾い上げてみると

………ジュエルシードだった

もう無印が始まっていたんだ、お兄ちゃんと相談しないといけないなあ

と思い、家に急いで帰ろうとすると、私の前に立ちはだかる人がいた

「それを渡してください」

………フェイトだった、バリアジャケットを纏った…

とりあえず、渡さないけどそのバリアジャケットって恥ずかしくないのかな

「とりあえず渡すのは嫌だけどその露出だらけの服、着てて恥ずかしくないの??」

「えっ……あ、あのっ、服のことは後でいいのでとりあえずそれを渡してください」

「いや、だから嫌だって……」

「じゃあ、力ずく「あ、ちょっと待って??」……はい」

お兄ちゃんから念話が来たので、こっちに来てくれるように頼んで、フェイトに不可視バインドをかける

あと、念のため魔力を持っていない一般人には分らないように結界も張っておく

「えっ……あれ、動かない??」

「ごめんね、ちよつとの間拘束させてね？」

別に、何もしないけど逃げられちゃ困るからね」

「あなたも……魔導師だったんですか」

「まあ、一応だけどね」

フェイトは、優奈と話している間にもバインドを解除しようとする

が、どうやっても外れない

「くっ……外れ、ない……」

「無理に外そうとしない方がいいよ？」

「バインドブレイクしようとしても、たぶん2日は掛かるからね」

「なっ…そんな事を出来る魔導師がいたなんて……」

そんな事を話しているうちに、お兄ちゃんが公園にやってきた

Side 恭介

公園に着くと、そこには優奈とフェイトがいた

不味いことってというのは、たぶんフェイトのことかな？

「とりあえず優奈、なぜこの子をバインドで拘束しているんだ？」

「あ、お兄ちゃん

「なんかジュエルシード渡せって言ってくるし、お兄ちゃんが公園に来るまでに逃げられたら困るからね」

「公衆の面前で、堂々と魔法使うなよ……」

「大丈夫、大丈夫

「一応バインドも不可視にしてあるし、魔力持ってない人には分らないように結界も張ってあるしね」

「もうバインド解いても大丈夫じゃないか？
どうせ、逃げられんだろうし……」

そう言うと、俺は優奈の結界の上から封時結界を張り、優奈はバインドを解く

「あなたは、なぜジュエルシードを集めるの？」

そうバインドを解除されたフェイトが聞いてきた

「そうだな、それは時の庭園で話そう

……… フェイト・テストロッサ」

3話 八神家の日常（後書き）

作「あとがきコゝナ」

このコーナーは作者の文才の提供でお送りします」

恭介「文才ねーだろーが…」

作「無いけど一回やってみたかったんだよ!!」

恭介「まあいい

とりあえず、今回は八神家での日常と無印編突入だな」

作「入り方が、少々強引ですがそこはご了承ください」

恭介「それで、少し能力についての補足を…」

作「まず、恭介と優奈の稀少技能ですが本編でもさんざん説明したように、能力行使には負担がかかります。これは、私が見ただのチートじゃ面白くないと思いつけました。ほかのSSでは、結構ノーリスクでチートって多いので。」

恭介「それでも、訓練すれば負担を軽減できるかな」

作「そこは、本人次第ということだ…」

まあ、ある程度は強くさせるつもりですが、ちゃんと負けるときは負けます」

恭介「まあ、補足はこのぐらいにしといて…」

次回「4話 時の庭園」

作「それでは、また次回」

4話 邂逅（前書き）

時の庭園まで進められなかったので、タイトルを変更しました
私の考えとは違う方向にキャラが勝手に動くので、なかなか大変です

前回に言葉だけ出てきた無限の剣製・王の財宝・対魔力C・直感C・
非殺傷設定付加を説明し忘れていたので説明します

・無限の剣製

Fateの士郎が唯一使える固有結界という特殊魔術
剣を見ただけで複製（ワンランク下がる）できる

防具なども複製可能だが、剣よりも魔力が多く必要になる

・王の財宝

ゲート・オブ・バビロン

Fateのギルガメッシュが使っていた黄金の都へつながらる鍵剣
空間をつなげ中のものを自由に取り出せる
武器の原典など様々なものが収められている

・対魔力

A～Dまである

ランク分の魔力攻撃を無効化する
ランクが上がることに負担が増す

通常はC

・直感

A～Dまである

Aはもはや未来予知レベル
通常はCで適切な展開を感じ取る程度
これもランクが上がることに負担が増す

・非殺傷設定付加

リリカルなのはの能力？

物理破壊を伴わない魔力衝撃で、敵を死傷させずに攻撃することができる

ただし、いくら物理破壊を伴わないといっても痛いものは痛い

また、生成技能が低かったり、命中箇所が脆かったりすると大怪我をすることがある

こんな感じの能力です

あと、F a t eとなのはの魔力ランクの関係は以下のような感じで考えています

F a t e なのは

E X E X

A S - S S

B A A A

C B + A A

D C

能力はこれからも増えていく予定です

しかし自分で書いてても、F a t e系が多いと感じる

まあ、戦闘向きの能力多数だからですけど……

では、4話どうぞー！！

4話 邂逅

Side フェイト・テストロッサ

私は、母さんに頼まれて毎日ジュエルシードを探していた

昔の、優しかった母さんに戻ってほしかったから……

今日も、アルフとは別行動でジュエルシードを探していた

公園に反応があったので来てみると、女の子がジュエルシードを持つてた

「それを渡してください」

そう女の子に言うと、女の子は少し驚いたような顔をしていた

「とりあえず渡すのは嫌だけどその露出だらけの服、着てて恥ずかしくないの??」

なんで、バリアジャケットが恥ずかしくないのか聞いてくるのが分からなかったけど、ジュエルシードを渡すのは嫌らしい

最悪、力づくで奪うしかないかな……

もう一度、ジュエルシードを渡してと女の子に言う

「えっ……あ、あのっ、服のことは後でいいのでとりあえずそれを渡してください」

「いや、だから嫌だって……」

「じゃあ、力ずく「あ、ちょっと待って??」……はい」

女の子から、微量に魔力が漏れ出してきた

念話を使っているらしいし、管理局員だったらややこしいことになる

少なくとも戦闘は免れないと思ったので、早く奪おうと思い動こうとする………が、動けなかった

「えっ…あれ、動かない??」

体にはバインドは掛かってないように見えるけどやっぱり動かないし、女の子は結界まで張り出した

「ごめんね、ちよつとの間拘束させてね？」

別に、何もしないけど逃げられちゃ困るからね」

「あなたも……魔導師だったんですか」

「まあ、一応だけどね」

やっぱり、魔導師だったんだ

私は、バインドブレイクをしようとしたけど全く外れる気配がない

「くっ……外れ、ない……」

「無理に外そうとしない方がいいよ？」

「バインドブレイクしようとしても、たぶん2日は掛かるからね」

「なっ…そんな事を出来る魔導師がいたなんて…」

「2日も掛かる様なバインドを使える魔導師なんて聞いたこともない」

「一体、何者なんだろうこの女の子は…」

「そうしているうちに、こちらに女の子と同じ顔の子がやってきた」

「とりあえず優奈、なぜこの子をバインドで拘束しているんだ？」

「あ、お兄ちゃん」

「なんかジュエルシード渡せって言ってくるし、お兄ちゃんが公園に来るまでに逃げられたら困るからね」

「お兄ちゃん？？っていうことは、さっき来た子は男の子？？」

「髪も長いし、女の子かと思ってた…」

「公衆の面前で、堂々と魔法使うなよ…」

「大丈夫、大丈夫」

「一応バインドも不可視にしてあるし、魔力持っていない人には分らないように結界も張ってあるしね」

「もうバインド解いても大丈夫じゃないか？」

「どうせ、逃げられんだろうし…」

バインドを解けた瞬間に、私は逃げようと身構えるが結局それは無駄に終わった

封時結界が女の子が張った結界の上にさらに展開されたからだ

逃げることを諦め、一応アルフに念話を送ろうとしたが繋がらなかった

たぶん、結界に念話妨害の効果もあるんだろう…

私は、この子たちになぜジュエルシードを集めるのか聞こうとした
なぜか、この子たちは管理局とは関係ないように思えたからだ

「あなたは、なぜジュエルシードを集めるの？」

「そうだな、それは時の庭園で話そう

………フェイト・テストロッサ」

「っ………なぜ、私の名前を知っているんですか？」

Side 恭介

「っ………なぜ、私の名前を知っているんですか？」

「なぜ、と言われても知っているものは知っているからだ

お前の母親はプレシアという名前のことや、アルフという使い魔がいること

プレシアに言われて、地球にばら撒かれたジュエルシードを探しに来たこと

ほかに色々知っているぞ?」

フェイトは驚きのあまり固まっているようだ

まあ、これでフェイトは俺のことを警戒するだろうがそれでいい

闇の書の時にも八神家側として活動するためには、今から警戒心を植え付けておく必要がある

あとは、どうやって時の庭園に行くかだな…

「フェイト、プレシアに会いたいので時の庭園に連れて行ってくれるか」

「なぜ、あなたを母さんの所に連れて行かなければならないんですか?」

やはり、警戒されているな…

仕組んだことだから仕方ないとはいえ、美少女に嫌われるというのはなかなか堪えるな

《お兄ちゃん、今何か変なこと考えてなかった??》

《いや、別に変なことなんか考えてないぞ?》

ただ、美少女に嫌われるのは答えると思ったただだよ》

そう答えると、優奈はいきなり俺の足を踏んできた

なんなんだ？？優奈の方を見ても、半眼で睨まれるだけだし…

あっ……フェイトのこと忘れてた…

「じゃあ、俺たちが持っているジュエルシールドをあげるからプレシアに聞いていてくれないか？」

あとプレシアに伝言、『いつまで過去に縋っているつもりだ』
そう伝えてくれ」

そう言うと俺は結界を解除し、フェイトにジュエルシールドを二つ渡す

フェイトは、無言で頭を下げてそのまま向こうへ走って行った

「お兄ちゃん、フェイトに警戒されちゃってるけどいいの？」

「ああ、どうせ闇の書事件では敵対することになるんだから警戒されてもいいんだよ」

「お兄ちゃんは良くても私はどうするのよ？」

私はある限り、なのはちゃん達とは敵対したくないんだけどなあ
…」

「なのはとは敵対しないよ？」

管理局にも少し用があるしね」

「でも、なのはとフェイト戦はどうするの？」

「まあ、適当に観戦でもするかな…」

フェイトの前にはなのはと一緒に現れない方がいいだろうしね

で、あとはプレシアが食らいつくのを待ってればいいや」

「能力はどうする？」

私の能力見せたら、絶対管理局に捕まってモルモット行きだよ？」

「俺の能力は、見せるけど優奈は起源の書とルーアを見せない方がいいな

俺のは、なんとも誤魔化せるし……」

「私は、ルーアとユニゾン状態にいるよ

そしたらばれないと思うし、魔法も使えるしね」

「よし、じゃあそれで行くか

はやても、心配してるだろうしさっさと帰ろう」

そうして俺たちは、原作に介入し始めた

イレギュラー
異物を入れた世界は、少しずつ正史から遠ざかっていく

一つの波紋は数多の波紋を呼び、更なる異物が出現する
イレギュラー

4話 邂逅（後書き）

作「あとがき」ナ」

恭介「今回は、時の庭園に行くかと思いきやそこまで行かなかったな」

作「私の文才が至らないばかりにタイトル変更することになってしまいました」

恭介「で、次回からはなのはと接触するかも？」

「ってな話だけど、そこんとこどうなんだ作者」

作「一応その予定です」

「まだ完全に決めてるわけじゃないんですが…」

恭介「じゃあ、次回「5話 介入開始！」」

作「いつもアクセスしてくれている読者様に無上の感謝を…」

恭介「それでは、まだ次回！！」

5話 介入開始！（前書き）

ようやくの戦闘シーン

ほんの少しというのが、悲しいですが……

なかなかストーリーが進まない orz

5話 介入開始！

Side 恭介

フェイトと出会って数日後、俺は翠屋に向かっていた

ちなみに優奈は、はやてと図書館に行くのに付き合っている

せっかくリリカルなのはの世界に転生したんだし、一度翠屋で噂のシュークリームを食べてみたかったのだ

「いらっしゃいませ」

あれ、おかしいな……

今、某白い悪魔な人がいたような気がしたんだが…

「あ、あの、どうしましたか？」

「ああ、なんでもありません」

とりあえず、誤魔化したかな？いや、誤魔化せてないな…

「あの、シュークリーム4つをテイクアウトでお願いします」

「は、はい、少しお待ちください」

そういえば、昼間だからと油断していたが、今日日曜日だったんだ
った

はやてと暮らしていると、日付の感覚が狂っていくなあ…

なのはの魔力は、垂れ流し状態じゃない

つまり、淫獣ユウシに出会って魔法少女化しているということか

首からレイジングハートも掛けているし間違いない

ということは、少なくともジュエルシード1個は持っているはずだ

ユーノは見当たらないが、飲食店だし高町家の方にいるか探索に行っているかもしれんな

神社のジュエルシードは、後で見に行けばいいか…

そんなことを、考えているとなのはがやってきた

「お待たせしました」

「ありがとう、ええ〜っと…」

「なのは、高町なのはだよ！
君は??」

「そうか、ありがとう高町

俺は、林恭介」

「どういたしました…て…恭介…君?

って、ええ〜男の子〜!」

「そうだけど、そんなに俺って女の子っぽいかなあ」

「だってだって、髪も伸ばしてるし女の子みたいな顔だし……」

「そうか、気にしてたけどやっぱり俺って女顔なんだな」

「気にすることないよ、恭介君
だって、可愛いからね」

「高町、男は可愛いって言われても喜べないぞ……」

「恭介君、高町じゃなくなつてなのはって呼んでよ……」

出た、これが噂の「名前を呼んで」か……！

「いや、さっき会ったばかりなのにいきなり名前で呼ぶのは……」

「名前、呼んでくれないとお話するよ……」

「わ、わかった」

「なのは……これでいいだろ」

「うん……」

なのはとそんなやり取りをしていると、土郎さんがやってきた

「おやおや、この辺りでは見ない子だね」

「はい、最近この街に引越してきた林恭介です」

「恭介君か、よろしく」

「はい、よろしくお願ひします」

士郎さんと挨拶を交わすと、俺は代金を渡し店を後にした

「また来るといいよ」

「はい、そうします
なのはも、またな」

「恭介君、またね！」

そうして予想外のなのはとの出会いを果たし、俺は八神家に帰宅した

S i d e 高町なのは

私は最近、魔法少女になりました

ユーノ君がジュエルシードを探しているので、私もそのお手伝いです

私も、この街を守りたいから……皆を守りたいから……

今日は、ユーノ君は街でジュエルシードを探索しています

私も一緒に探索すると言ったんだけど、休んでてって言われちゃった

だから、お父さんに頼まれてお店の手伝いをしていたの

そんな時だった、彼が来たのは……

最初は、きれいな女の子だなと思っていたの

でも、実は男の子で……

男の子との友達は恭介君が初めてだった

そんな彼との再会は思っていたよりずっと早かった

Side 恭介

翠屋から帰ってきて、まだはやて達は帰ってきていなかった

とりあえず、買ってきたシュークリームを冷蔵庫に入れる

まだ、お昼には時間があるのでジュエルシードの探索に行こうかと考えていると、神社のほうで魔力反応

《優奈、神社のほうで魔力反応がした

俺が行くから、優奈ははやてから離れないでくれ》

《うん、分かったよおにいちゃん

気をつけてね》

念のために優奈に念話を入れると、俺は神社に向かって走り出した

俺がちょうど神社に着いた頃、なのはとユーノも着いたようだ

「ユーノ君、あれ何なの??」

「ジュエルシードが原生物を取り込んだんだ!!」

なのは、レイジングハートを起動して封印を!!」

「え〜と、どうやって起動するんだっけ?」

「我、使命をから始まるパスワードだよ!!」

「そんなに長い覚えてないよ〜!!」

「じゃあ、もう一度僕が言っから後に続けて!!」

『スタンバイレディ、セットアップ』

なのはとユーノが敵の前で漫才をしていると、レイジングハートが勝手に起動した

おお、さすがだな、なのは

レイ八さんをパス無しで起動させるとは…

その時、とうとう痺れを切らしたのか犬?がなのはに襲い掛かった

「なのは、バリアジャケットを!!」

「ふえっ!?!」

『バリアジャケット』

レイ八さんがバリアジャケットを構築し終わったとき、犬？がなのはにぶつかったが吹き飛ばされた

「いたた……ってほど痛くは無いかな

ええと、封印ってのをすればいいんだよね？

レイジングハート、お願いね？」

『了解』

シーリングモード、セットアップ』

「リリカルマジカル、ジュエルシードシリアル16

封印……！」

『封印』

封印が終了すると、そこには子犬が倒れていた

今のところは、何とか原作通りだな

さて、出ていくとするか…

「よう、なのは

さっき振りだな」

「ふえ……、恭介君！？

なんでここにいるの……！」

「ああ、ジュエルシードの反応があつたから来てみたんだ」

「っていうことは、恭介君も魔導師なの？」

「そつだぞ」

「貴方は何のためにジュエルシードを探しているんですか？」

「うん？」

俺は、別にジュエルシードは集めてないぞ

ただ、町が破壊されると厄介だからな

これからは、俺も一緒に手伝うぞ」

「で、でも、ジュエルシードは危ないものなんですよ！」

「大丈夫だよ

なのはも、俺もジュエルシードを探すの手伝っていいか？」

「いいよ、一緒に頑張ろうね恭介君！！」

そうして俺は、なのは達と一緒にジュエルシード探索をすることになった

正史に介入する異物
イレギュラー

歴史の改変がようやく始まった

5話 介入開始！（後書き）

作「あとがきコゝナ」

優奈「ようやくなのはちゃんが出てきたね」

作「ついでに、淫獣もな」

優奈「なかなかストーリーも進まないね」

作「原作だったら2話ぐらいだもんな」

優奈「さつさと進めるか、更新速度上げようよ作者」

作「だが断る！！」

優奈「これ以上更新速度遅くなると、読者様が離れていっちゃおうよ??？」

作「それは勘弁なので、できるだけ進める」

優奈「あと、10000PV突破したよ！！」

作「ユニークも3000突破だ」

優奈「10000PV突破記念に何か番外編でも書こうよ」

作「では選択肢を…」

1. 番外編

2・さつさと本編進める
3・その他

優奈「感想欄で皆様の意見をお聞かせください」

作「ちなみに、何もない場合はどっちもします」

優奈「いいの？そんなこと言ってて」

作「なんとかなる、いやなんとかする」

優奈「それならいいんだけどね…」

「じゃあ、次回「6話」なのはの決意」

作「誤字脱字指摘・感想お待ちしております」

優奈「それでは、また次回！！」

6話 なのはの決意（前書き）

とうとうアリサとすずかが登場です

相変わらず、戦闘と言えるような戦闘はありません
なのはとフェイトが出会ったら、少しは多くなるかな？

それでは、魔法少女リリカルなのは ～とある兄妹の転生記～ 始まります

6話　なのはの決意

Side　恭介

神社での一件から、俺は毎日ジュエルシード探索を手伝っている

基本的に優奈は、はやてについてもらっている

闇の書事件のときに優奈の能力が必要になってくるので、今管理局に見つかるのは少しまずい

それに、いつ猫姉妹とエンカウントするかも分らないし……

さて、今もなのはがジュエルシードを封印中だ

「リリカルマジカル、ジュエルシードシリアル20　封印!」

『封印』

「なのは、お疲れさま」

「うん、ありがとう恭介君」

「なのは、明日はジュエルシード探索は休みだ」

「えっ、恭介君なんで??」

「毎日ジュエルシード探索でなのはも疲れているだろう」

ユーノも明日は休みだぞ、それに明日はサッカーの試合の応援

があるんだろう?」

「うん、わかったよ恭介」君

と言う訳で、毎日のジュエルシード探索でなのはとユーノの疲労が激しいため、明日は休むことになった

「恭介君も明日一緒に試合の応援に行こうよ

それに、恭介君に会わせたい友達もいるんだ」

「わかったよ、じゃあ明日翠屋で待つとくぞ」

そついうと、俺はなのはと別れて八神家に帰宅した

.....

翌日、なのはと翠屋で待ち合わせしそこでアリサとすずかに出会った

「初めまして、なのはの友人の林恭介だ」

「私は、アリサ・バニングスよ!

バニングスと呼ばれるのは嫌だから、アリサと呼びなさい!」

「月村すずかです

すずかって呼んでくださいね?」

「わかった、これからよろしくなアリサ、すずか」

「アリサちゃん、すずかちゃん、恭介君、早く行こうよ?」

そう言うと、俺たちは試合があるサッカーグラウンドに向かった

-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-

サッカーグラウンドでは、土郎さんが監督をやっている翠屋JFCと相手チームの試合が始まっていた

結構こちらが有利だな……まあ、なのはとすずかとアリサに応援されていたら士気も上がるか…

試合が始まって少ししたとき、試合の方が慌ただしくなった

どうやら、土郎さんのチームのFWが怪我をしたらしい

「困ったな……今日は予備の選手がいなくていうのに……」

どうやら、控えの選手がいらないらしいので10人で試合をすることになりそうようだ

そのとき、なのはがいらんことを言い出した

「お父さん、恭介君に手伝ってもらったら??」

「おお、それはいいな

恭介君、ぜひ試合に出てもらえないかな？」

「いや、でも俺はサッカーとか知りませんし……」

「大丈夫だよ、練習試合だから大丈夫だ」

「そこまで言うなら……分りました、試合に出ます」

そんなこんなで、試合に出る羽目になったが、シュートも何とか決めたし2・0で勝つことができた

- - -
- - -
- - -

翠屋では、祝賀会が開催されていた

俺たち4人は翠屋の外で試合のことを話していた

「恭介、あなた結構上手かったじゃない」

「そんなことないぞ、サッカーはルールとかも知らないし適当に動いてシュートを決めただけだからな」

俺たちが話していると、そこに土郎さんがやってきた

「恭介君今日はありがとう、とても助かったよ」

「どうだい、これからもううちのサッカーチームに入る気はないかい？」

「すみません、土郎さん

ほかにもやりたい事があるので、サッカーチームに入ることは出来ません」

「そうか、でもやりたくなったらまた声をかけてほしい

私は、いつでも待っているからね」

そういつて、土郎さんは中に戻って行った

「なのは、恭介、私はこれからお稽古があるからじゃあまたね」

「私もお稽古あるし、なのはちゃん、恭介君、またね？」

「ああじゃあな、アリサ、すずか」

「アリサちゃん、すずかちゃん、またね」

アリサとすずかは、そう言って帰って行った

その直後、ジュエルシードの反応があった

「レイジングハート、お願いっ！！」

「アルト、セットアップ！！」

《《スタンバイレディ、セットアップ》》

俺のバリアジャケットは、黒のジャケットに黒のジーンズ

こちらそこ、某KY執務官と同様、厨二とか言っ

シンプルで動きやすい服装っていったらこうなったんだ

アルトは、日本刀の状態になっている

俺はその場で封時結界を発動し、のはとユーノとともに反応があった場所に飛んで行った

そこには、巨大な大木がそびえ立っていた

「ひどい……………」

なのはが、街の惨状を見て悲しい表情を浮かべていた

「なのは、封時結界を展開してあるからそこまで被害はないよ」

そんななのはに俺はフォローを入れたが、

「私、本当は気付いていたの……………キーパーの男の子が持つてるって…………でも、見間違いだと思って…………」

なのはの悲しい表情は直らず、自分のせいで街に被害が出たことを悔やんでいた

「なのはのせいじゃない

俺が、今日は探索は休みだと言ったからだ」

俺は、今日このことが起きることも知っていたが敢えて回収はしなかった

ここでなのはは精神的にも成長して、また新たに決意を固めるからだ
数少ない成長の機会を無駄にはできなかった

だからと言って、出来れば街に被害は出したくなかったが…

「なのは、早くジュエルシードを封印するぞ!!」

「…うん!!」

「でも、ここからじゃ遠すぎて無理だよ!!」

「なのは、ジュエルシードは俺が見つける

だからなのはは、封印効果を付加した砲撃を打て
アルト、エリアサーチ」

《エリアサーチ》

「見つけた!!」

なのは、座標を送るからそこに向かって砲撃を打て!!」

俺はそう言つと、こっちに迫ってきた木の根をアルトで切り落とす
ていった

「分かったよ!!」

《シューティングモード セットアップ》

「行って、捕まえて!!」

ピンク色の砲撃が大木に直撃した

「リリカルマジカル、ジュエルシードシリアル10 封印!」

《封印》

「ありがとう、レイジングハート

恭介君、いろんな人に迷惑かけちゃったね」

「…そうだな、なのは」

「私、今までユーノ君のお手伝いをするためにジュエルシードを探してた

でも、今回のことで私決めたんだ!

ジュエルシードから街を守るために探すんだって!」

「そうか、なら俺もその手伝いをするよ」

「うん、改めてよろしくね!

ユーノ君、恭介君」

「ああ、こちらこそこれからもよろしくな」

「なのはも恭介も、ありがとう…」

今回の事件でなのはは、街を守るためにジュエルシードを探すことを改めて決意した

新たな決意をした少年少女

そこに立ちほだかるは漆黒の衣を身に纏いし探索者

二人の少女は災厄の種を奪い合いぶつかり合う

6話 なのはの決意（後書き）

作「あとがきコゝナ」

恭介「アリサとすずかがようやく登場したな」

作「あと、なのはが魔砲を覚えました」

恭介「マスタースパースとか教えたら、もっと面白いことになりそうだ」

作「魔王じゃなくて冥王あたりになりそう…」

恭介「あと、前回やったアンケートの結果を発表!!」

作「2が1票、3が1票ということで結局本編進めつつ番外編もやるということだ…」

恭介「番外編はいつ頃やるんだ??」

作「一応、アリサとすずかが登場したしやれないことはない
ちなみに、もうプロットは作り終えているのであとは書くだけだ」

恭介「じゃあ、さっさと書いて公開しろよ」

作「できるだけ善処する」

大学とかもあって忙しいんだよ…」

恭介「それより、アンケートにご協力ありがとうございました」

作「雨季様からハイパーポーションを頂いたぞ」

恭介「雨季様、ありがとうございました！」

作「では恭介、次回予告を……」

恭介「次回「7話 月村家のお茶会」、お楽しみに!!」

作「あと、次回からは優奈と恭介の二人で後書きやってもらっしな」

恭介「えっ……ちよ……おま……」

作「それでは、また次回!!」

7話 月村家のお茶会（前書き）

最近優奈とはやてが空気化しています

恭介中心となるとどうしてもこうなる

誰か文オプリーズ……

では、魔法少女リリカルなのは　とある兄妹の転生記　始まりま
す

7話 月村家のお茶会

Side 恭介

俺は今、月村家でなのは・アリサ・すずか・はやて達4人娘から尋問を受けている

なぜこんな状態になっているかというところ、そもそもの始まりは、なのはからお茶会の誘いを受けたことからだった

- - -
- - -
- - -

俺たちは、いつものように放課後ジュエルシードを探索していたんだ

「恭介君、なかなか見つからないね」

「ああ、それにジュエルシードは発動前はただの綺麗な宝石だからな
反応もほとんどないし、やはり発動した後に封印するのが手っ取り早いんだがな」

「なのは、恭介、もう暗くなってきたし今日の探索はこの辺で終わっておこう」

「そうだな」

「うん、わかったよユーノ君」

あつ… 恭介君、明日すずかちゃんの家でお茶会があるんだけど恭介君も来る？」

「止めておくよ、一度会っただけだし……」

「恭介君…来てくれないの？」

ぐうつ……そんな上目づかい+涙目コンボをするな…

恭介の精神に9999のダメージ！！

「ああもう、わかった！！」

わかったからそんな顔をするな！！

でも、本当に俺が行っていいのか？」

「うん、大丈夫だよ！

すずかちゃんも来ていいって言ってたよ！

すずかちゃんも、新しい友達を招待するって言ってたし」

本当は行く気はなかったんだが、まあいいか

フェイトとももう一度会つときたいしな、丁度いいか…

それにしても、最初の計画がごとごとく崩れていつているな

自業自得なのはわかっているんだがなあ…

「わかった、なのは

じゃあ、明日は翠屋の方で待ってればいいのか」

「うん、それでいいよ！
じゃあ、またね」

翌日、朝起きてみるとはやてと優奈もどこかに行く様子だった

「優奈、どこかに出かけるのか？」

「うん、はやてと一緒にちょっと友達の家に行くんだ」

「そうか、俺も少し友達の家に行くから」

「ん…わかったよ」

そんなやり取りを優奈として、俺は翠屋に向かった

翠屋では、なのはと恭也さんが待っていた

「なのは、悪い待ったか？」

「ううん、大丈夫だよ」

「二人とも、それじゃあ行くぞ」

（～月村家～）

月村家につき、恭也さんは忍さんと仲良くどこかに行ってしまった

「なあ、なのは

あの二人って付き合ってるのか？」

「うん、そうだよ」

なのはと喋りながらすすつかの部屋に向かっていると、そこにメイドさんが二人来た

「ようこそお越しくださいました」

私は、ノエル・K・エアリヒカイトと申します」

「私は、ファリン・K・エアリヒカイトです」

「俺は、林恭介と言います」

「恭介様、なのは様、お嬢様は庭におられますので、ご案内します」

「お願いします」

あと、俺のことは恭介でいいし、敬語もなくていいですよ」

「それでは、恭介さんでよろしいですか？」

敬語はなくならなかったけど、まあ少しはましになったか

「それでいいですよ」

庭に着くと、すすかとアリサそしてはやて達がいた

「へっ……」

「どうしたの、恭介君」

「どっ、どうして優奈とはやてがここにいるんだあああああ！
！」

「うるさいわねえ、いきなり大声なんか出して」

「お兄ちゃん、落ち着いて落ち着いて

あのね、すずかちゃんとは図書館で出会ってお友達になったの」

すずかが読書好きなことをすっかり忘れていた

出会う時期が少し早まっただけなこと

だが、ここで会うのは本当に予想外だった

「なんや、恭介君もすずかちゃんと友達やったんやな

最近、よく出かけてるなあって思ってたら、こんなに女の子と
友達になっとったんやな」

やばい、はやてが怒っている

はやては、あんな性格だからめつたに怒らないけど怒ったらかなり
怖いんだよな

OHANASHI的な意味で……

まだ魔法が使えなくてよかったよ

使えてたらOHANASHIがOHANASHIにレベルア
ップするからな…

「はやて、色々とすまん
今度必ず埋め合わせするから許してくれ」

「うーん、仕方ないなあ…
わかった、ちゃんと埋め合わせしてもらっからな」

「わかったよ、はやて」

俺とはやてが、二人で話しているとアリサが俺たちの関係を聞いてきた

「ねえ、恭介とはやてと優奈はどんな関係なの？」

「優奈はおれの双子の妹、はやては俺たち兄妹の居候している家の主」

「確かにそっくりね、恭介と優奈」

「うん、二人とも髪をほいたらどっちがどっちかわかんなくなるね」

「ちょっと待ってよ、二人とも！

恭介君と優奈ちゃんが居候してるってどういこと!？」

「俺たちは、行くあてがなかった所をはやてに拾ってもらったんだ」

「お兄ちゃん、拾ってもらったって…
もうちよつと違う言い方ないの？」

「しかたないだろ、事実なんだし…」

「で、私が行くあてがないって言うから一緒に住もうって言ったんや」

「そうだったんだ」

そうみんな話していた時、ジュエルシードが発動する気配がした

《なのは、恭介、ジュエルシードが発動したよ！》

《わかっている、ユーノ結界を頼んだ》

《うん、わかったよ》

念話が終わると、ユーノがジュエルシードの方へ逃げ出した

「みんな、私ユーノ君探してくるね」

「俺も行くぞ」

なのはだけでは心配だからな

《優奈、ここで待っていてくれ

すぐに終わらせてくる》

「なのはだけでいいんじゃないの？」

「いや、なのはの運動神経を試してみる」

「そうね、じゃあいつてらっしゃい」

「アリサちゃん、酷いよ!？」

そう言うと、俺たちはジュエルシードの方へ走りだした

ジュエルシードの反応があった場所に行ってみると、そこには巨大化した猫がいた

「ええつと…なんで大きくなってるのかな？」

「たぶん、猫の大きくなりたいという願いを叶えたからだと思うよ」

「うーん、流石にすずかちゃんも困るだろうね…」

「なのは、今回は手出ししないから一人で封印してみるよ」

「うん、わかったよ恭介君」

『フォトンランサー フルオート
ファイア』

そのとき、猫に金色の魔力弾が大量に飛んできてそのまま猫を気絶させた

「レイジングハート!!」

なのはがバリアジャケットを纏って猫の方に向かい、猫をかばう

『ワイドエリアプロテクション』

「……ロストログアの探索者か……」

「え？」

あなたは誰？どうしてこんな事をするの？」

なのはが話しかけたが、フェイトは聞く耳を持たなかったようだ

「ロストログアジュエルシード……申し訳ないけど頂いていきます」

『サイズフォーム セットアップ』

フェイトがバルディッシュをサイズフォームにすると、なのはに襲いかかった

「レイジングハート！」

『プロテクション』

なのはは、なんとか初撃を防いだようだが次の瞬間、フェイトに後ろに回り込まれた

「バルディッシュ」

『アークセイバー』

「くっ!？」

『プロテクション』

なのはは何とか飛んできた斬撃を防ぎ、さらに高く飛ぼうとするが

フェイトが攻撃してきて罅迫り合いの状態になってしまっ

「なんで…こんなことするの？」

「答えても、たぶん意味がない…」

お互いが後方に飛んで地面に着地する

『デバイスフォーム』

『シューティングモード』

『ディバインバスター スタンバイ』

『フォトンランサー ゲットセット』

二人は攻撃の準備をするが、そのとき猫が起き上がりなのはが猫の方に気を取られてしまったせいでフェイトの魔法が命中した

『プロテクション』

「その辺でいいだろう」

今回はこっちの負けだ、ジュエルシードを持って行け」

「なぜあなたがここに…
バルディッシュ！」

『フォトンランサー』

フェイトが、もう一度フォトンランサーを展開したようだが、無駄だ

「なのは、後ろに下がっている」

「えっ…で、でも恭介君が……」

「俺は大丈夫だから、早く！」

「フォトンランサー　ファイア!!」

俺は、なのはの前に立ち対魔力をあげると俺に向かって来ていた魔力弾は全てかき消えた

「そんなんっ……」

「だから、ジュエルシードはやると言っただろ早く封印して持って行け」

「バルディツシュ、ジュエルシード封印」

『封印』

「待って、名前はなんていうの?」

「フェイト……フェイト・テストロッサ」

「私は……」

そう言って、フェイトはなのはの名前を聞かず、どこかに飛んで行った

「恭介君、あの子…フェイトちゃんの事知ってるの？」

「ああ、知っている

だが、なのはには教えん」

「なんで??」

「知りたかったら、自分で聞き出せばいいじゃないか
フェイトも、根は悪い子じゃない
ちゃんと、話してくれるときが来るさ」

「うん!! わかったよ!!」

「じゃあ、フェイトちゃんに勝つために訓練手伝ってね!」

「ああ、わかったよなのは」

そうして、俺たちはみんなのところに戻ったあと、ユーノが念話してきた

《なのは、恭介、もうこれ以上は《手伝うなとかだつたらぶっ飛ばすぞ》…で、でも》

《そっだよ、ユーノ君

私も、フェイトちゃんとお話したいしね》

《というわけだ、ユーノ
わかったか?》

《うん…恭介、なのは、二人ともありがとう…》

「なのは、ユーノ、行こう
みんなが待ってるぞ」

二人の少女と一人の異物が交わりしとき
イレギュラー

とうとう世界が歪み始める

7話 月村家のお茶会（後書き）

恭介「あとがきコナ」

優奈「今回からは、私たちがこのコーナーを進めていきます」

恭介「なんでも、交互に登場させるぐらいなら一度に思っただ結果らしい」

優奈「今確認したらしいけど、20000PV&5000ユニーク突破したらしいよ」

恭介「こんな駄文を読んでくださる読者様には本当に感謝だ」

優奈「それにしても、本編で久しぶりに私の出番があったね

作者ももうちょっと私の出番増やしてくれてもいいのに…」

恭介「優奈の出番はA・Sになったらかなり増える予定だそうだ」

優奈「そ・れ・で・も!!」

今出とかなないと、空気化が進んじゃうんだよ!」

恭介「それに、まだ本編も進んでないしな」

優奈「一体いつになったら、あの弄りやすいKY執務官は出てくるのかな?」

恭介「さあな」

優奈「じゃあ、次回予告を…」

次回「8話 嬉し恥ずかし温泉旅行」

恭介「誤字脱字指摘・感想・質問お待ちしております」

優奈「それでは、また次回!!!」

8話 嬉し恥ずかし温泉旅行（前書き）

今回なんかフラグっぽいのがたっちゃんたような予感でも、まだヒロイン確定してないんだよね…

戦闘シーンはかなり難しかったので、原作知らないとわかりにくいかな？

では、魔法少女リリカルなのは ～とある兄妹の転生記～ 始まります

8話 嬉し恥ずかし温泉旅行

Side 恭介

月村家でのお茶会から数日後……

俺たち兄妹とはやて、高町一家、アリサにすずかとノエルにフアリ
ンは海鳴温泉に来ていた

月村家に行ったあと、なのはの訓練をした帰りに誘われたのだ

はやての車椅子をどうしようかと思っていたが、そこはちゃんと大
丈夫ということらしいので行くことにしたのだ

海鳴温泉に着くと、高町夫婦はどこぞの新婚みたく散歩に行っ
てしまっ

残った俺たちは、温泉に行くことになった

なのは達は、ユーノを連れて行こうとしているようだ

《恭介！助けてくれ！！》

《悪いが、今俺がそこに割って入ると大変なことになるから嫌だ》

《そんな……僕たちは友達じゃないのか！？》

《友達だが、今は散れ……》

「キユキユ〜〜〜《恭介、絶対恨むからね!!》」

そう言うと、ユーノは女湯の方に連れて行かれた

「恭也さん、俺たちも行きましょう」

「そつだな」

Side 優奈

「ふう〜、気持ちいいね〜」

「優奈、いくらなんでも蕩け過ぎよ」

「だって〜気持ちいいんだもん〜」

「アンタね……」

「でも、ここの温泉ほんと気持ちええで?」

はやては、ノエルに抱えてもらって温泉に入っているのだ

「やっぱりはやてちゃん達も誘ってよかったね」

「そつね…」

とろろでなのは、ユーノをこっちに寄りしなさい!」

「ふえ?アリサちゃん、ユーノ君をどうするの?」

「ユーノを洗ってやるのよ！」

「なのは達も一緒にユーノを洗う？」

「いいよ！」

「優奈ちゃんはどうする？」

「私は、露天風呂に行くから」

「だって、淫獣（笑）に裸見られたくないし…」

「お兄ちゃんも何考えてユーノをこっちに寄越したんだろう」

「そういえば、ここの露天風呂って子供限定の混浴だった…」

「まあ、向こうは恭也さんかお兄ちゃんしかいないみたいだしいいか」

「入ってきたとしても、お兄ちゃんだろうし…」

「ガチャ」

「優奈ちゃん、ここにいたの？」

「こっつて、混浴だよ？」

「なのはちゃんか…」

「別に大丈夫だよ？こっつて子供限定の混浴だし、向こうはお兄ちゃんも恭也さんしかいないみたいだし」

「恭介君が入ってくるかもしれないよ？」

「別に、お兄ちゃんに見られてもいいもん」

私となのはがそんな話をしてると、

ガチャ

また誰が入ってきたようだった

「へっ……」

そんな間抜けな声が聞こえてきた

Side 恭介

「恭介君、結構鍛えてるね」

「それ程でもありませんよ」

そういう恭也さんこそ結構鍛えてるように見えますが」

「俺はある剣術をやってるからね」

「そうなんですか」

「そういえば、恭介君はなのとはどうなっているんだ？」

最近よく翠屋に来たり一緒に外に行くのを見かけていたからな」

「別に何も……」

まあ、なのとは友達です」

「それ以上の関係を望むなら、俺と父さんを倒せよ」

「少しはマシになりましたが、相変わらずシスコンですね
最初の頃なんか、なのはと一緒にいるとこ見かけたらかなり殺気を向けてきてましたからね」

「そうか??」

無意識にやっていたから分らんが、全く怯える様子がなかったぞ」

「内心ではかなりのドキドキものでしたけどね」

「そうか」

おれはそろそろ上がるが、恭介君はどうする?」

「俺はまだ入っています」

「じゃあ先に上がってるよ」

そう言うと、恭也さんは風呂から出て行った

そういえば、ここって露天風呂があったな

一度行ってみるか…

ガチャ

「へっ……」

な、なななな何でなのはと優奈がここにいるんだあああ!!!

「お兄ちゃん、こっち向きなよ」

「優奈、お前絶対からかってるだろ
何気に理性に響くからやめろ」

「じゃあ、もつとからかう」

優奈がそう言った途端、俺の背中にもたれかかってきた

「おま……ちよ……」

「なのはちゃんもやってみなよ
お兄ちゃんの背中、あつたかいよ?」

「ゆ、優奈……いい加減やめてく」ピタッ「……っ!?!?」

なのはまで、背中にくっついてきやがった

やばい、これは本格的にやばい

「優奈ちゃん、恭介君の背中あつたかいね」

「そつでしょ?」

「うん、なんだか安心するよ」

「優奈、なのは、そろそろやめてくれ
もつ十分満足しただろ」

「うん、しょうがないね
じゃあなのはちゃん、あがるっか」

「そうだね…」

今日はこのぐらいで我慢しておくよ」

そう言って、なのはと優奈は風呂からあがっていった

ああ、本気でやばかったな

俺は素数を数えると風呂をあがった

ちなみに、なのはは風呂からあがった後自分がしたことあまりの
恥ずかしさにのぼせて倒れてしまい、優奈は肌が妙に艶々だったそ
うだ

夕方、旅館の中を歩いているとなのは達がアルフと出合っていた
仕方ない、助けに行くか

「すみません、どちら様ですか？《フェイトのところの使い魔か？

》

「いや、人違いだったようだ

済まないね《あんた達、あんまりお痛をするとガブツといくよ！

！》

「そうですね《あんまり舐めてるとそっちが痛い目見るぞ》

夜、みんなが寝静まった頃ジュエルシードの反応があった

「恭介、ジュエルシードが発動したようだよ」

「わかっている

なのは、行くぞ！」

「う、うん！」

まだ、風呂のことを引きずっているようで俺の方を見ると顔を赤くしていた

ジュエルシードの反応があった場所では、もう既にフェイトとアルフがジュエルシードを封印していた

「フェイトちゃん!!」

「アンタ、また来たね

お痛をするとガブツといくつて言わなかったかい？」

「フェイトちゃん！何でこんなことをするの？」

「私は……」

「フェイト!!」

そんな甘ったれた奴の話なんか聞かなくていい!!」

「ユーノ、お前はあの使い魔の相手をしていてくれ」

「わかったよ！

なのは、頑張ってるね」

そう言うと、ユーノはアルフを巻き込んで違う場所へ転移した

「そうそう、言っておくが俺は二人の戦闘には余程なことがない限り手は出さないからな」

「そう、わかった

アルフの相手、良い使い魔だ」

「ユーノ君は使い魔じゃなくて、お友達だよ！！
なんで、こんなことするの？」

「話しても意味がない
バルディッシュ！」

『フォトンランサー ゲットセット』

「レイジングハート！お願い！！」

『フライアーフィン』

フェイトのフォトンランサーをなのはは飛んで避けた

「くっ…バルディッシュ！」

『サンダースマッシャー』

『ダイバインバスター』

なのはとフェイトの砲撃の打ち合いになり、フェイトが押し負ける

「やった！」

『サイズスラッシュ』

なのはが油断したその瞬間、フェイトがなのはの後ろに回り込んでなのはの首にバルディッシュを突き付けようとした

「はい、ストップ」

俺は、なのはとフェイトの間に割り込んでバルディッシュをアルトで止めた

「出て来ないんじゃないの？」

「この勝負はフェイトの勝ちだからな

これ以上やっても怪我するだけだから出てきたんだ

レイジングハート」

『プットアウト』

俺は、レイジングハートが出したジュエルシードをフェイトに渡す

「ほれ、約束のジュエルシード」

「ありがとう……は言わない

「アルフ！」

フェイトはアルフを呼ぶと、飛んで行くこととする

「待って！！」

私、高町なのは！」

「なのは…これ以上関わってくると手加減が出来なくなるから」

そう言うと、フェイトはアルフを連れてどこかに飛んで行った

「恭介君、私また負けちゃったよ

ちゃんと訓練もしてるのに…」

「それはしょうがないさ

なのはとフェイトは大きな差がある

何かわかるか？」

「ううん、わからないよ」

「それは絶対的な経験の差だ

経験を積んでないと、格下でも負けることはよくある

それだけ、経験は大事なんだ」

「でも、そんなのどうやって埋めればいいの？」

「技術を身につけるか、同じく経験を積むかしかない

あとは、なのは自身が考えるんだ」

「うん……」

「そういえば、結界張ってなかったけどみんな心配してるんじゃないか？」

「ふえええ！？」

「は、早く帰らなきゃ……」

そうして、俺たちのフェイトとの二度目の戦闘は敗北に終わった

ちなみに、旅館に帰った後散歩に行っていたと言いついて大人組に怒られてしまった

子供組はと言うと、なのはが色々と尋問を受けていた

なのはが何を聞かれどう答えたのかは知らないが、優奈とはやてとアリサが居たから碌でもないことは確かだ

再び交わる二人の少女

そして新たなる勢力が次元の壁を越えてくる

8話 嬉し恥ずかし温泉旅行（後書き）

優奈「あとがきコナ」

恭介「今回は、フェイトとの2度目の戦闘、そして敗北でした」

優奈「お兄ちゃん、わざと温泉の事触れないようにしてるでしょ」

恭介「ぐっ…そ、そんなことは…」

なのは「お邪魔します」

優奈「お、来た来た」

なのは「あれ？何で恭介君と優奈ちゃんがいるの？」

恭介「ここはあとがきだから、二人で進めてたんだ」

優奈「温泉のこと話す予定だったからなのはちゃんもここにいたら？」

なのは「ふえええ！？」

あ、あれは優奈ちゃんもしてたから、私もなんて思っちゃったりしたわけで決して恭介君のことが好きとかそういうのじゃなくて、で…でも恭介君は嫌いじゃなくて…… キュウウウウ」バタン

優奈「ありやま、倒れちゃった」

でもお兄ちゃんのこと、嫌いじゃないんだって」

恭介「いやでも俺は……………」

ああもう、今回は終わりだ終わり!!」

優奈「誤魔化したね…」

ではお兄ちゃん、次回予告を…」

恭介「次回「9話 新たなる勢力」

お楽しみに!!」

優奈「誤字脱字指摘・感想・質問などお待ちしております」

恭介「それでは、また次回!!」

9話 新たなる勢力（前書き）

ようやく無印も折り返し地点です

あと、戦闘シーンが難しいです

稚拙な書き方ですが、どうぞお楽しみください

では、魔法少女リリカルなのは ～とある兄妹の転生記～ 始まります

9話 新たなる勢力

Side なのは

早朝、桜台で私は恭介君と模擬戦をしていた

「レイジングハート！」

《アクセルシューター》

「シュート!!！」

4つの魔力弾が恭介君に襲いかるが、恭介君はそれをものともせず
に切り裂いて向かってくる

「さあ、なのは!ここからどうする!!！」

《ソニックムーブ》

恭介君がそう言うと同時に姿が消え、後ろから声がする

「ぐっ!? バインドか!！」

やっぱり、バインドを仕掛けておいてよかった

「かかったね、恭介君!!！」

いくよ、ディバイン…バスター!!！」

《ディバインバスター》

バインドかかってたから多分当たったよね？

《マスター！！》

レイジングハートが警告してくる

後ろを振り向くと、恭介君がアルトを私に突きつけていた

「チェックメイト」

「ああ〜、負けちゃった〜」

「今の模擬戦、バインドかけて砲撃までは良かったがその後気を抜いたことが敗因だな」

あと、バインドの構成が甘いな

たぶんフェイトでも、すぐ解除できるだろう」

「えっと、じゃあバインドをもっと堅くすればいいの？」

「まあそれもあるが、もうちょっと接近戦を鍛えないとすぐに落とされるぞ」

でも、なのはは運動神経が切れてるしなあ」

「運動音痴なのは言わないで〜！！」

私だって、運動音痴なのは分ってるもん…

「自覚はあるんだな

そうだな、魔力食うけど身体強化でもかけとくか？

ただ、バカスカ砲撃は打てなくなるが」

私ってそんなにバカスカ砲撃ばかり撃ってるかなあ…

「今の所そうするよ」

「じゃあ、その術式今渡すよ

アルト」

《分りました、マスター》

《身体強化の術式、受け取り終了しました》

「ありがとう、恭介君」

「別に大したことはないさ

なのはが決めた事なんだからな」

そう、温泉旅行でフェイトちゃんに会ってからずっと、どうやって勝てるかを悩んでいた

恭介君が言ってくれた方法は2つ

1つ、フェイトちゃんに負けない技術を身につける

2つ、フェイトちゃん以上の経験を積む

恭介君は、どちらかを選ぶと思ってこの2つの方法を教えてくれたんだろう

でも、私はそれだけじゃ足りないと思った

それで、温泉旅行から帰って来た後もずっと悩んでいた

悩んでいたせいで、アリサちゃんやすずかちゃんにも迷惑をかけた
やった

私がうじうじしているとき、アリサちゃんがとうとう怒ってきた

「なのは!!」

あんたがうじうじしてんのを見ると、こっちまでイラつくのよ!!

何悩んでんのか知らないけど、やること全部やって悔いの無い様にすればいいじゃない!!」

そうだ、どっちかって考えてたからこんなに悩んじゃったんだ

技術と経験、どっちもフェイトちゃんに負けないぐらいにして、お話を聞いてもらえばいいんだ

そんなわけで、私は恭介君から毎朝模擬戦と魔力制御の訓練を交互でやることになった

本当は、朝と放課後にやるつもりだったんだけど、恭介君とユーノ君がやりすぎって言うから朝だけになったんだ

フェイトちゃん、待っててね!!

絶対お話聞かせてもらっからね！！

S i d e 恭介

なのはの訓練 & a m p ; 模擬戦を始めて数日後…

やっぱりなのはは才能があると物凄く実感した

俺が教えたことは、すぐに飲み込んで応用する

原作のなのはを余裕で超える強さになっている

ただ、欠点は敵に甘いということぐらいだな

なんかもう、魔王突き抜けて冥王ぐらいまで行っちゃいそうな気がする…

ますます、闇の書事件起こせなくなってきた……

こんな調子だと、そのうち守護騎士なんて軽くあしらっつ位になりそ
うだ

いつものように、放課後街でジュエルシードを探索していると、公園
の方でジュエルシードの反応があった

「なのは、行くぞー!!」

「うん!!」

俺たちは公園のほうに飛んでいくと、もうフェイトが封印するところだった

「バルディッシュ!!」

《シーリングフォーム セットアップ》

「封印!!」

「なのは、今度も俺は傍観するぞ」

ここで、次元震を起こさないとアースラが来るかどうか分からないからな

だけど、フェイトに怪我はさせられないから俺が封印することになるのか…

チートなんだから、大丈夫……だよな？

「うん、わかったよ!

フェイトちゃん、今度はちゃんと話を聞いて!!」

《デバイスモード》

「話すことなんかない」

《サイズフォーム セットアップ》

「私が勝ったら、ちゃんと話を聞いてもらつんだから!」

《フライヤーフィン》

なのはは、そう言うと空に飛び上った

「行くよ、バルディッシュ」

《ブリッツアクション》

フェイトが消え、次の瞬間なのはの後ろに回り込んでバルディッシュを振り下ろした

《フラッシュムーブ》

フェイトがバルディッシュを振り下ろした瞬間、なのははフラッシュムーブを使い、距離をとる

「ディバインシューター」

《ディバインシューター》

「シュート!」

「くっ」

《ディフェンサー》

フェイトはなのはのディバインシューターを何とか防御し、なのはに向かつて飛ぶ

なのはも、フェイトを迎撃しようとして杖が鏝迫り合いになった瞬間、周囲を魔力の暴風が吹き荒れた

なのはとフェイトは二人とも、吹き飛ばされユーノとアルフに助けられる

「ジュエルシードが完全に暴走したか…

フェイトとなのはは下がっている

フェイト、あれはもう壊してしまってもいいか？」

「それで、暴走が収まるなら…

でも、ジュエルシードを破壊することなんて」

「俺ならできる

ユーノとアルフはなのはとフェイトを守っているよ？」

そう言うと、俺は王の財宝からゲイト・オフ・バヒロンゲイ・ボルグを取り出す

「いくぞ、ジュエルシード！その魔力、貰い受ける！

ゲイ・ボルグ刺し穿つ死棘の槍！！！」

俺は赤い槍を持つと、ジュエルシードに向かつて投げた

ピキッ…ピキピキッ……パリーン

ガラスが砕けるような音とともに、ジュエルシードは完全に破壊された

「すまんな、ユーノ」

「ごうするぐらいしか思いつかなかった」

「いいよ、恭介」

「怪我が無かっただけでも十分さ」

「でも、今の槍はなんなんだい？」

「今の槍か？」

「これは、簡単に言うと狙ったやつを必ず破壊するような槍だ」

「そんな物、ロストロギア並じゃないか!?!」

「そつちの世界ではそうなるかもな」

「俺とユーノがそんな会話をしているうちに、フェイトとアルフは帰ってしまったようだ」

「なのはが、また話せなかったと嘆いていた」

S i d e ????

「みんな、今回の旅は順調？」

「はい、現在第三船速にて航行中です」

「艦長、ある管理外世界にて小規模次元震が観測されました
ただ……」

「ただ、何？」

「小規模次元震を観測した直後、次元震が消滅しました」

「消滅！？」

「はい、計器に狂いがなければそうなります」

「では、今から本艦は進路を通常航路から外れ次元震が観測された第97管理外世界へ向かいます」

「了解」「」

「さて、あまり大きな事件にならなきゃいいんだけどね」

Side 恭介

次元震が発生してから数日後、ようやくレイ八さんの修復が完了した

「レイジングハート、直ったんだね？」

恭介君、これでまた訓練できるね！」

《一緒に頑張りましょう、マスター》

そう、レイ八さんが直るまで、なのはも訓練と探索を止めるように言っていた

「まあ、それなりに日が経ったし大丈夫かな
ユーノはどう思う?」

「うん、僕もなのはは大丈夫だと思うよ」

「じゃあ、明日からまた探索と訓練、再開だな」

「恭介君、また明日!」

「ああ、またな」

そう言うと、俺はなのはと別れ帰ろうとした時、ジュエルシードの反応があった

《なのは!!ジュエルシードが発動したぞ!
できるだけ早く行くが、なのはの方が早く着きそうだが無理はするなよ!》

《うん、大丈夫!!》

ユーノ君と一緒に居るから早く来てね!》

《わかった》

なのはに念話を入れると、俺は周りに認識阻害結界を張る

「アルト、セットアップ」

《ようやく出番ですか

スタンバイレディ セットアップ》

アルトをセットアップすると、結界を維持したまま空を飛んで公園のほうに飛んでいく

確か、今回の発動でアースラが介入してくるんだよな…

あいつが出てくるまでは、傍観しとくか…

Side ????

「艦長、次元震が観測された管理外世界で魔導師同士の戦闘が発生しています」

「クロノ執務官、出られるわね？」

「座標設定は、既に完了しています
後は、命令があればいつでも！！」

「では、戦闘行為の停止と関係者の事情聴取を」

「了解しました」

では、今からその世界に飛びます」

「気をつけてね〜」

気が抜けるような声に送り出されながら、クロノは転移していった

Side 恭介

公園に着くと、なのはとフェイトはちょうど協力して木の暴走体を倒そうとしているところだった

「いくよ、レイジングハート!!」

《シューティングモード》

「撃ち抜いて……デイバイン」

《バスター》

「貫け轟雷」

《サンダースマッシュャー》

二人の砲撃が暴走体のバリアを破壊し、ジュエルシードを露出させる

《シーリングモード セットアップ》

《シーリングフォーム セットアップ》

「封印!!」

どうやら、二人同時に封印したようだ

「フェイトちゃん、ジュエルシードには衝撃を与えちゃいけないみたいだね」

「うん……だけど、ジュエルシードは譲れないから」

《デバイスフォーム》

「私は、フェイトちゃんとお話したいだけなんだけどなあ……」

《デバイスモード》

そして、二人がぶつかり合った瞬間、なのはとフェイトの間に青い魔法陣が現れた

「そこまでだ！！時空管理局のクロノ・ハラオウンだ

ここでの戦闘は危険すぎる

全員武器を下ろすんだ！」

星の少女と管理する者が交わるとき、一人の異物イレギュラーが介入する

雷の少女は母の場所に帰り、真実を知ることになる

9話 新たなる勢力（後書き）

優奈「あとがきコナ」

今回は、レイジングハートがゲストです」

レイハ《どうも、よろしくお願ひします》

恭介「今回は、温泉旅行後から管理局介入前までだったな」

優奈「クロノ君が少しだけ登場したね」

恭介「相変わらずのKYだがな」

レイハ《そうですねよ、せっかくマスターが意気込んでたのに…》

優奈「あそこで介入されたら、誰でもやる気なくなるよね…」

恭介「さて、今回は俺VS某KY執務官戦があるそうだ」

レイハ《フルボッコですか？フルボッコなんですか？？》

恭介「なぜそんなにフルボッコに拘る」

レイハ《マスターのお話を邪魔した罪は重いですから》

優奈「なんか、レイジングハートが黒い…」

恭介「でも、作者によると一方的展開だそうだ」

優奈「あとは、フェイトちゃんが時の庭園に帰る話だね」

恭介「そんなところだ」

ではレイ八さん、次回予告を」

レイ八《分りました

次回「10話 交渉は慎重に！」》

一同「次回もお楽しみに！！」

10話 交渉は慎重に！（前書き）

今回は長くなってしまったので、前編後編に分けました

相変わらず戦闘シーンで苦労しています

では、魔法少女リリカルなのは ～とある兄妹の転生記～ 始まりま
す

10話 交渉は慎重に！

Side 恭介

「そこまでだ！！時空管理局のクロノ・ハラオウンだ

ここでの戦闘は危険すぎる

全員武器を下ろすんだ！」

ようやく、クロノが登場か…

フェイトが逃げそうだし、そろそろ出ていくか…

「フェイト！？」

フェイトが近くに浮かんでいたジュエルシードを取ろうとするして、クロノに攻撃されたようだ

俺は、認識障害結界を解除し、フェイトのもとに飛んで行くと撤退するように告げる

「フェイト、今は早く退け

アルフ、フェイトを頼む」

「礼は言わないよ！

フェイト、早く行くよ！！」

「待て！！

君たちも邪魔をするな！！」

「撃っちゃダメッ!!!」

クロノがフェイト達を追おうとするが、俺となのはがクロノの前に立ち塞がった

その間に、フェイト達は転移で逃走していた

「君たちは何をしているんだ!!」

なぜ彼女たちを庇った!!」

「おいおい、何を言っている

見知らぬ奴に知り合いが攻撃を受けたんだ、庇うのは当然だろう」

「僕はちゃんと武装解除をしると言った!

彼女はそれを無視したんだ」

こいつは何を言っている…

「だから、攻撃した…と?」

管理局だか何だか知らんが、自分の正義が押し通ると思うなよ」?

「管理局を知らない?

お前は魔導師だろうが!!」

魔導師が管理局を知らないはずがない!!」

こいつ、自分が正義だと本当に思っているようだな…

「知らないものは知らない、どうしてそれが分らない」

「さては、お前が次元震を消滅させた奴だな！

何かやましい事でもあったんだろう！

だから知らない振りをしてやり過ごそうとしているのか？」

もう……黙らせようか……

「おい……クロノとか言ったか……

もう黙れ……これ以上……喋るな

なのは、少し離れていてくれ」

「抵抗する気か？」

ならば、捕縛して連れて行くまでだ……！」

そういうと、クロノは魔力弾を撃ってきた

「行くぞっ……！」

《ステインガースナイプ》

「そんなもの効くか……！

ゲイ・ジャルク
破魔の紅薔薇……！」

俺は、ゲート・オブ・パピロン王の財宝からゲイ・ジャルクを取り出し、魔力弾を切り裂いていく

「なにっ……！？」

そう言っているとクロノは、俺から距離をとる

「これならどうだ!!」

《ブレイズキャノン》

魔力弾で駄目なら砲撃か、対魔力の効果でも防げるがそれじゃあ面白くないな…

それなら俺はゲイ・ジャルグを破棄し、王の財宝からある盾を引きずり出す

「
　　ロー・ファイアス
　　熾天覆う七つの円環!!」

投擲武器に対してはかなりの強度を誇るこの盾…

砲撃魔法って範囲に入るんだろうか？

そんなことを考えながらも、盾を維持する

結局、クロノの砲撃では一枚も花卉を破ることが出来なかった

「無傷だっ!?!」

俺は、密かに異能復元でこれからの攻撃に非殺傷設定を付加する

「こんなものか？

　　じゃあ、今度は俺の番だな

トレス・オン
　　投影開始

ロールアウト
　　全行程完了、全投影待機」

俺の後ろに並ぶのは、数百の剣や槍などの剣軍

「さあ、これが避けられるか？」

フリースアウツ
ソードパレルフルオーブン
停止解凍、全投影連続層写！……！」

それが一斉にクロノに向って射出される

クロノは回避を試みるが、数百にも及ぶ剣軍は早々回避できるものではない

「くそっ！」

プロテクション！」

《プロテクション》

クロノは避けそこなった剣を防ごうとプロテクションを張るが、足を止めたが最後、一斉にクロノの方へ剣軍が殺到する

「うわああああ……！」

そのままプロテクションが破壊され、クロノは串刺しになり気絶しながら公園に落ちて行った

そのまま落ちて赤い花を咲かせるかと思ったが、ユーノがチェーンバインドを発動しクロノを受け止めていた

『少しいかしら』

俺の前にモニターが現れ、リンディ提督の姿が映し出される

「何の用だ？」

『私は時空管理局のリンディ・ハラオウン

あなたが倒した子の上司よ

そう、クロノが先走ったことは謝るわ

でも、話を聞きたいので出来ればこちらに来て事情を聴きたい
んだけど…』

「あのクロノとかいう奴は、気絶してるだけだ

あと、そっちに行くつもりはない

話がしたいなら、また明日この公園で話そう」

『分ったわ、じゃあ明日のお昼にこの公園でいいかしら？』

「それでいい

あと、こっちに来るのは貴女とあと二人まで連れてきてもいい
ですよ

それ以上連れてきた場合は…どうなっても…知りませんよ？」

『分ったわ』

話が終わり、通信パネルが消えると、クロノの下に魔法陣が展開され
れ転送されていった

「恭介君！！大丈夫??？」

地上に降りると、なのはが心配そうに声をかけてきた

「大丈夫だ

あと、明日の昼にこの公園でむこうと話すことになったから

「恭介、管理局に連絡せずにここに来た僕が言うのもなんだけど、執務官攻撃して大丈夫だったの？」

「あつちから攻撃してきたんだから、正当防衛だろ

それに、ここは管理外世界

そつちの法律は通用しない」

「それならいいんだけどね

あと、あの剣軍はなんなの？」

「あれは、まあ…レアスキルみたいなもんだな

前に次元震が発生したとき、俺が消滅させただろ？」

あの時とかの武器を、一斉に射出しただけだ」

「クロノとか言う人の状態からして、非殺傷設定みただったけどあんなもの食らいたくないね」

「まあ、やり過ぎるとトラウマになるかもしれんしな」

「恭介君、今日は帰ろう？」

「そうだな、明日に備えてもう帰るか

明日は、翠屋で待ち合わせするか」

「うん、そうしよう！」

じゃあまたね、恭介君」

「またな、なのは」

八神家に帰ると、はやてと優奈が何か内緒話をしていた

後日、この時内緒話を無理やり聞いとけばよかったと後悔するのだが、それはまた別の話……

翌日翠屋に行くと、もうなのはは来ていた

「おはよう、恭介君」

「おはよう、なのは

じゃあ早速行くか」

「うん！」

そう言っていると、俺たちは昨日の公園に向かった

公園には、すでにリンディさん、クロノ、あとエイミィが来ていた
見つからないように、軽く索敵したが約束通り3人で来てくれたよ
うだ

「どうも、改めて自己紹介をします

俺は、林恭介です」

「たっ、高町なのはです」

「という事はユーノ、お前死ぬんじゃないね？」

「えっ？なんで??？」

「だって温泉行ったときに女湯入ってたろ」

「ユーノ君……少し……頭、冷やそうか……」

《ダイバインバスター》

「ぎゃああああ……」

なのはにダイバインバスターを零距离から打たれ、昏倒した

ユーノが、数分後に目を覚ました後ようやく話し合いになった

「じゃ、じゃあ本題に入っていていいかしら」

リンディさんは、まださっきの事に少し引いているようだ

「さて、今回の経緯を聞かせてもらえるかしら」

「ユーノ、説明は任せた」

途中から介入したし、俺が説明するより当事者のほうがいいだろう

決して面倒と言う訳じゃないぞ

「わかった」

ユーノは、ジュエルシードを発掘した事からばら撒かれて集めることになった理由を話した

「立派だわね」

「だが、同時に無謀でもある」

「ジュエルシードは、次元干渉型の危険なロストロギア
一つでも、次元震を引き起こす危険なものなの」

そこでなのはが、リンディさんに質問した

「あの、ロストロギアとか次元震ってなんですか？」

リンディさんが、なのはにロストロギアや次元震について説明する

「では、今からジュエルシードの回収は管理局が全権を持ちます」

「民間人である君たちは、これ以上関わるのは危険だ
今までのことは忘れて、日常に戻るといい」

「えっ…でも……」

「まあ、今すぐじゃあ整理もできないでしょうし、一晩考えてくる
といいわ」

やはり、原作通りこう言ってくるか…

「一晩なんて必要ない

管理局が責任を持って回収してくれるなら、もう関わる必要は無

いな

「じゃあ行くか、なのは」

「えっ…恭介君、私は……」

「待って！」

「貴方には、まだ聞きたい事があります」

「何故だ？」

「関わらなくていいんだから、別に聞くことなんて無いじゃないか？」

「クロノを圧倒した未知の魔法、それに貴方が何故ジュエルシードの回収に関わっているのか

それを聞く必要があります」

「ふん、どうせそれを聞いたところで良くて協力しろ、最悪公務執行妨害でもつけて拘束か？」

「なのはにしてもそうだ、わざわざ回りくどい事をせず協力してほしいと素直に言ったらいいものを」

それを聞いたリンディさんが、微かに動揺する

「まず、一晩考える必要なんて無いんだ

クロノが言ったように、関わる必要は無いのになぜ考える時間を与える？」

「そう言ったのは、なのはの性格から考えて向こうから協力してくると踏んだからだ

「なのはは優秀だ、それこそ管理局が欲しいくらいに……」

あとは、向こうから協力したいと言ってきたら、そっちの指揮下

にも置けるしな」

「そんな出鱈目な事を言うな!!」

クロノはそう突っかかってくるが、リンディさんの様子は違った

「確かに、その通りよ

管理局は慢性的な人材不足

でも、立場的にこちらから協力をして欲しいとお願いすることはできない

だから、こんな真似をしたの

決して悪気があったわけじゃないわ

だから改めて言うわ、恭介君、なのはさん、私たちに協力してもらえないかしら」

「分かりました!」

なのはは元気に返事をする

「条件がある」

「貴方には、無条件で協力してもらえとは思ってないわで、どんな条件かしら」

「まず一つ目、俺の能力は教えない

調べるなら勝手に調べてもらってもかまわないけどな

二つ目、俺を管理局の指揮下に置かない

三つ目、俺やなのはを管理局へ勧誘しない

これは、俺やなのはは個人の意見を尊重するためだ」

「一つ目は難しいけど何とかするわ
でも、魔力測定ぐらいはさせて貰えない？」

「上に黙っておくことと、俺にも結果を見せてくれるんならいいぞ」

「じゃあ、明日みんなでアースラに来て貰えないかしら」

「分かった」

「じゃあ、明日の今日と同じ時間でいいか」

「迎えにはクロノを遣すからね」

そう言つと、俺はシートを片付けてみんなと別れた

10話 交渉は慎重に！（後書き）

優奈「あとがきコナ」

恭介「今回は、リンディさん達との交渉？だったな」

優奈「作者はこのシーンを見て、絶対誘導してるだろと思っていたそうです」

恭介「俺が介入したから、少しはマシになったがな」

優奈「お兄ちゃん、プレゼントがあるよ」

恭介「雨季様、性転換薬ありがとうございます
そのうち使わせてもらいます」

優奈「次回は？」

恭介「まだ本編」

今回の交渉？後からアースラに行くまでの話だ」

優奈「フェイトちゃんが出てくるみたいだね」

恭介「それ以上は言うな、ネタバレになる」

優奈「次回「11話 隠された真実」」

恭介・優奈「次回もお楽しみに！！！！」

番外編 優奈の企み（前書き）

3万PV突破を記念して雨季様にリクエストされた番外編です
あと、少しだけ最後R - 15 & amp ; シリアス？になります

では、魔法少女リリカルなのは くとある兄妹の転生記 け 始まります
す

番外編 優奈の企み

Side 優奈

お兄ちゃんが、ジュエルシードを何とかしようとして頑張っていたある日のこと

家に、この家宛で荷物が届いた

差出人を見ると、作者となっている

誰か知りあいにいたっけなあ……

まあいいや、開けてみよう

開けてみると、小瓶が一つとゴスロリ服と紙が入っていた

なになに……

【私の友人の雨季さんからプレゼントだ

小瓶は性転換薬だよ、恭介君に飲ませて……その後はお任せするちなみに、恭介が気づくかもしれないので薬は無味無臭にしておいたぞ

あと、着せ替えするなら一緒に入っているゴスロリ服も着させてみるよ

じゃあ、いろいろと楽しんでくれ by 作者】

これは早速使ってみないと

まずははやてちゃんと協力して、お兄ちゃんの朝食の中にこの薬を盛らないとね

そうと決まったらこうしちゃいられない

早速はやてちゃんのとこに行かないと…

ふふ…ふふふ…

Side はやて

最近恭介君がよく用事か何かで家を空けるようになった

まあ、それでも優奈ちゃんが一緒にいるし一人のときに比べたらだいぶマシなんやけど…

少し聞いてみたら、もう少ししたら用事が終わるしその後は今まで以上に一緒に居れるって言ってた

それに、少ししか聞いてへんねんけど誕生日にいい事があるって言うってたし…

夕飯もみんな食べて、部屋に戻って本を読んだら優奈ちゃんがあわてた様子でやってきた

「はやてちゃんはやてちゃん、ちょっと協力してほしいことがあるの」

「なんなん優奈ちゃん、なんかかなり危ない雰囲気纏ってるけど…」

「あのね、今日ちょっとした伝手で面白いもの手に入れたんだ」

そう言うと、ポケットからババーン！！と小瓶を取り出した

「あのね、これ性転換薬なの」

「本当なんそれ？」

「てか、誰に使うん？」

「効果に関しては大丈夫よ！！………たぶん

あと、使うのはお兄ちゃんだよ」

「たぶんて………本当に大丈夫なんか？」

「大丈夫だよ！お兄ちゃんだもん

だから、はやてちゃんも協力して？」

恭介君女の子にして何すんねんやるか？

まあ、なんにしても面白そうやし協力しよか

「いいよ、私は何すればいいん？」

「朝食のお兄ちゃんの分にこの薬を盛るの」

「でも、明日やったら恭介君どっか行く言うてたし、いつやるん？」

「そうだねえ…私がお兄ちゃんの暇な時間聞いておくよ」

「それにしても、恭介君女の子にするんはいいけど、もともと女の子っばいじゃん」

「なんでわざわざ女の子にするん？」

「今でも十分女の子……いや、男の娘やしなあ」

「確かに今のままでも十分なんでしょうけど……
む・ね・が・な・い・の・よ……！！！！」

「もしかして、優奈ちゃんってそっちの人なん？」

「そっちってどっちよ……」

「まあ、お兄ちゃん相手ならどっちでも行けるよ？」

「あと、女の子のお兄ちゃん……いやお姉ちゃんです着せかえしてみた
いの……！！」

「ほんま優奈ちゃんはお兄ちゃんLOVEやなあ……」

「これだけ聞くと、もう苦笑いするしかなかった」

「でも、着せ替えのときは私も混ぜてな」

「もちろんよ！！」

Side 恭介

「最近なぜか知らんが、優奈が暇な時が無いかと聞いてきた」

なんでも、最近はジュエルシードに掛かりつきりだから私たちの相手もしてほしいとのことだ

まあ、最近は探索の成果も出てないからリンディさんに少し抜けることを伝えると、快く了承してくれた

まだ、あの時の交渉に負い目があるようだ

こっちも、相手が組織人なのを理解して、それに付け込んだからお互い様なんだけどな

とにかく、一日暇ができたと優奈に伝えると嬉しそうにはやてのところに飛んで行った

まあ、いつも気を張ってばかりだし偶にはこういうのもいいかな…
と思っていた時期が俺にもありました

朝、優奈と一緒にいつもの鍛練をし終わるとはやてが朝食を作っていた

「もうちょっと待ってな、あと少ししたらできるし」

「いつも悪いな、はやて」

暇なので新聞を読んでいると、はやてから食事ができたと声がかかった

「「「いただきます」」」

食事を口に運ぶと、突然体が熱くなってきた

何事かと思っただが、こんな事をするのは優奈ぐらいだ

「優奈…お前、なにをs……」

突然、体の熱が引くと同時に体の異変に気がついた

俺はどんなに女顔だろうが、生物学上は男だ

じゃあ、この二つの膨らみは何なんだろう…

まさかと思っただが、さすがにもう一つの方は確認したくない

「優奈、一体何を盛ったんだ？」

声もいつもよりだいぶ高くなっている

「ん？ただの性転換薬だよ？」

「お前なあ……」

「はあ、もういいや」

優奈のこういうところは昔からだから、もういろいろと諦めている

「お兄……じゃなくてお姉ちゃん、とりあえず食事が終わったらいろいろな服着せてみるからね！

さ、最近あまり構出番がなかったって貰えなかったからこんな事したんじゃない

んだからね／＼／＼」

「優奈にツンデレは似合わんよ

あと、メタ発言は止める」

仕方ない、これもある意味自業自得か…

それなら、今日は優奈たちの相手をしてやるか

食事が終わると、優奈の部屋に連れて行かれる

もちろんはやても一緒だ…：聞いてみると、はやても共犯らしい

優奈の部屋中にあつたものは、服 服 服…と、部屋中が服だらけ
だった

「「さあお姉ちゃん（恭介君）、ここにある服全部着て貰うよ（で
！」「」

さすがの服の多さに逃げ出そうとするが、優奈から新たなる死刑宣
告を受ける

「お姉ちゃん、もし逃げちゃったり、ここにある服全部着なかつた
ら解毒剤渡さないからね」

ああ、なんだか優奈が黒い

「解毒剤って…：この薬時間制限ないのか？」

「うっん、私がそう改造したよ

あと、服着てもらったら写真も撮るからね

「これも拒否したら、わかってるよね？」

腹を括るしかないな、これは…

「じゃあ、お姉ちゃんの覚悟も決まったところでコスプレタイム
！！

まずは、無難に聖祥の制服！」

「優奈、どこで着替えるんだ？」

「ここだよ？」

「ここ！？せめて仕切りかなんかないのか？」

「ダメ！」

だって今は女の子なんだし別に見られても平気でしょ？

それにお姉ちゃん、今は制服だけど他の服の着方とかわかるの？」

「ぐっ……わかった」

「そうそう、ちゃんと下着も女の子のを用意してるし安心してや」

下着まで女物を着けることになるとは…

「安心できない……」

「ほらほら、早く着替えないと私たちが脱がしちゃうよ？」

「こんな風に……ほいっ」と

優奈がいきなり上着を脱がしてきた

「ひゃあー！」

びっくりして、変な声をあげてしまった

「お姉ちゃんも結構可愛い声出すんだね」

「恭介君、年齢私と同じなくせしてこの胸なんやー！」

揉んでほしいて思ってたのか？それとも、私に対する当てつけか
！？」

はやてが俺に愚痴愚痴言いながら、シャツの上から胸を揉んできた

「いや、だからそんなこと思って…ひゃうー！」

はやて！き、着替えるから放してくれ！」

「お姉ちゃん、女の子なんだからそんな乱暴な言葉遣いじゃ駄目だよ？」

「そつやそつや、ちゃんと女の子みたいな言葉使わなあかんで」

「はあはあ………やっと着替えた………」

「お姉ちゃん可愛い………！！！！！」

「あかん、恭介君可愛すぎや

その可愛さは反則やる………」

「ひゃうー!!」

二人ともいきなり抱きつかないで〜!」

数分後……十分堪能したのかようやく二人が放してくれた

「ふう……助かった」

「じゃあ、写真撮影ね!」

その後、写真を撮られて次の服に着替えることになった

「じゃあ次はこれの服や!」

そう言うてはやてが取り出したのは、ゴスロリ服だった

「あ、これ性転換薬もらった時に一緒に入ってた服だね」

「この薬貰い物だったのか…」

で、ゴスロリ服も着てみるとまた二人に抱きつかれた

そのあとは、また写真撮影…

この後も、着替える 写真撮影の繰り返しだった

ちなみに着た服は、メイド服・巫女服・ドレス・ナース服・セーラー服・スク水(白)・猫耳+肉球+尻尾装備 e t c . . .

結構危ない服もいろいろあったけど、ようやくすべて着終えた私は、なぜか物凄い達成感があった

今はもういつもの服に着替えて、リビングで寛いでいた

「もういいでしょ、優奈」

いつの間にか言葉使いも変わっていたけど、気にしないことにする

「うん、十分堪能したし、お姉ちゃんの部屋行こっか」

私の部屋に行くと、優奈は解毒剤を出してきた

それを優奈は口に含むと、私にキスしてきた

「えっ…なにw……」

「んちゅ……ちゅ……ちゅぷ……ん……ぷはぁ」

「ん……くっ……はぁ……はぁ……」

また体が熱くなって、元の体に戻る

「えへへ、お兄ちゃんの初めて…貰っちゃった」

「優奈……」

「ん……ごめんね」

でも、私はお兄ちゃんしかいないから……」

それだけ言うと、優奈は俺の部屋を出て行った

部屋に残った俺は、その姿を追いかけられなかった

番外編 優奈の企み（後書き）

作「あとがきコゝナ」

今回は優奈がないので私と恭介で進めていきます」

恭介「今回はなあ……」

性転換はあんまり思い出したくない」

作「完全に着せ替え人形だったもんな

あと、撮った写真は写真集にして配っていきたいと思います」

恭介「配んじゃねえ！！」

作「あと、性転換した恭介の名前募集」

恭介「あんまりやり過ぎると、エクスカリバー打ち込むぞ！」

作「すみません」

恭介「最後のつて伏線？」

作「さあな、そこは想像にお任せする

だって番外編だもの」

恭介「番外編なのに本編よりシリアスになってんじゃねえか」

作「最後だけだろ！

番外編だからってすべてギャグで片付くと思うなよ？」

恭介「ギャグで終わらせるよ!!」

作「ちなみに、次回は本編ですがそれもシリアスになるかもしれない
せん」

恭介「まあ、原作自体もシリアス成分は多めだけど…」

作「まあいいじゃないか、恭介が介入すれば何か変わるかもよ?」

恭介「結局俺に丸投げかよ…」

作「では、感想・質問などお待ちしております」

二人「では、次回もお楽しみに!!」

11話 隠された真実（前書き）

更新が結構遅れてしまいました

先の展開がなかなか決まらずに悩んでいたらいつの間にか結構日が

……

今回は、戦闘シーン無しなので少し短めです

あと、恭介と優奈の出張も受け付けています

では、魔法少女リリカルなのは ～とある兄妹の転生記～ 始まります

11話 隠された真実

Side 恭介

みんなと別れたあと、俺は微弱な魔力反応を感知しその場所へ急いで飛んで行った

遠見市のマンションの屋上にはフェイトとアルフが立っており、転移魔法を発動させているところだった

フェイト達のいるマンションの近くに降りると

「アルト、サーチャーを飛ばして転移座標を記録しておいてくれ」

『了解しました』

「フェイト達には気づかれなないように頼むな」

『分っています』

俺は、フェイト達に気づかれないうちにサーチャーを飛ばして転移座標を記録した

Side フェイト・テストロッサ

〓〓遠見市 住宅街のマンション屋上〓〓

「お土産はこれでよし」と

「甘いお菓子ねえ……困難である人は喜ぶのかね」

そう言つて、アルフはフェイトの持つお菓子の入った紙袋を受け取る

「わかんないけど……こういつのは気持だから……」

「ふーん」

「次元転移、次元座標……876C4419……3312D699……3
583D1460……779F3125」

フェイトが呪文を唱えると、足もとに金色の魔法陣が浮かび上がり、
光が強くなっていく

「開け誘いの扉、時の庭園、テストロッサの主のもとへ」

魔法陣がさらに強く光り、黄金の光が二人を包みこんで、光が天へ
と昇って行った

Side 恭介

『マスター、転移座標の記録完了しました』

「よし、俺たちも行くぞ」

『管理局に連絡しなくてもいいのですか？』

「する必要はないよ…」

あ、優奈も一緒に来てもらおうかな」

そう言っただけは、念話で優奈を呼び出した

《優奈、今から時の庭園に乗り込むけど一緒に行けるか？》

《ふえ！？お兄ちゃん？？》

いきなり念話してこないでよ！》

《悪い悪い…それより行けるか？》

《大丈夫だけど……今どこ？》

《フェイトの拠点のマンションの屋上の近くだから、マンションの屋上で待ってる》

《わかった、すぐ行くよ》

マンションの屋上に移動して数分後、優奈がユニゾン状態で飛んできた

「優奈、何でユニゾンしてるんだ？」

「だって、私そうしないと転移できないよ？」

そうだった、俺は使えることは使えるんだけど魔力消費が激しいから苦手なんだった

このことを始め知ったとき、やっぱり人間、少し能力得ても得意不得意があるんだと実感した

「すまん、俺が転移苦手なの忘れてた…」

「じゃあアルト、転移座標こっちに転送してね」

『分りました……………送信完了』

「お兄ちゃん、行くよ！」

次元転移、次元座標……………」

詠唱が終わると同時に、蒼銀の魔力光が俺たちを包み込んだ

〓〓時の庭園〓〓

「ふーん、ここが時の庭園か…」

「なんだか不気味だね」

『マスター、時の庭園最深部に謎の反応をかなり微弱ですが検知しました』

「ん？魔力反応じゃないのか？」

『いいえ、違います』

どちらかと言うと、マスターが使う魔術の方に似ています』

「お兄ちゃん、行ってみない？」

「そつだな、気になるし行ってみるか」

そつ言うと俺たちは、反応のあった最深部に向かって歩き出した

Side プレシア・テストロッサ

ビシッ…ビシッ…

室内に鞭で叩く音が響く

「あなたはっ、プレシア・テストロッサの娘なのっ！

これだけ時間をかけてっ、まだ5つしか手に入らないのっ！！」

ビシッ…ビシッ…

「うっ…くっ…」

「はあはあ…ジュエルシードはまだまだ足りないわ

フェイト、あなたは優しい子だから戸惑うかもしれないけれど相手に情なんか必要ないわ

だから、最低13個はどんな手を使ってでも奪い取ってくるの

「よー」

「はい…母さん…」

「じゃあ、早くいつてきなさい！」

「そういえば母さん、ジュエルシードを集めている最中に会った魔導師が」

『いつまで過去に縋っているつもりだ』

と言っていました

あと、『会いたい』とも」

「……………っ！？誰なのそれは！！」

フェイトの言葉に、プレシアはかなり動揺する

「分かりません、でも私たちのことをいろいろと知っていました

ジュエルシードを渡してくれたり集めてる様子はないので、悪い人ではないと思うんですが…」

「ジュエルシードを集めてないなら、そいつのことは気にしなくていいわ

あと、その魔導師からも利用できるなら利用し尽くさない！」

「はい、母さん」

「じゃあさっさと行きなさい」

それだけ言うと、プレシアは自分の部屋へ帰って行った

「ゴホッ…ゴホゴホッ…」

もう時間があまりないわ

早く…早くアルハザードに辿り着いて失った時間を取り戻さないよ……

…でも、何者かしら……私たちのことを知っているなんて…」

Side 恭介

フェイト達と思われる魔力反応を避けて、俺たちは最深部にやってきた

「ここら辺の筈なんだけどな…」

「お兄ちゃん！！こっちこっち！」

優奈の方に行ってみると、部屋の隅っこの方がぼうつとした感じで光っていた

『マスター、これは魂の欠片のようです』

「成仏せずに残留しているのか？」

『はい、ただ反応が微弱すぎるので消えかけの状態です』

「とりあえず、確保するか」

優奈、魂保護する方法って何かあったっけ？」

「うーん、出来るかどうかわからないけど聖杯モドキ作ってその中に入れるって言うのはどう？」

「聖杯か…」

「よし、それでいいっつ」

そう言うと、俺は聖杯を創り出すために集中する

いつも、宝具とかを作ったりしてるけど、聖杯はその比にならない
仮にも第三魔法を再現するのだからな

「異能復元

偽・聖杯」

そう言うと、俺の手に小さな杯が浮かび上がってくる

聖杯は、極端機能さえあれば人間でも無機物でも何でもいい

なので今回は、聖杯の名の通り杯の形を模してみた

まあ、その方が創造しやすかったというのもあるけど…

「ふう……何とか形ができたな

あとは、っと…」

聖杯を魂に近づけると、一瞬聖杯が光り魂を吸い込む

「これでいいだろうな

優奈、この魂の解析はできるか？」

「今は魂が弱ってるから無理だね…

でも、魔力で魂を回復させていけば解析できるよ

この状態でお兄ちゃんが回復させれば2日ぐらいしたら解析できる状態になるんじゃないかな」

「そうか、だったらいったん戻るか？」

それとも、プレシアに会いに行くか？」

「今は戻ろうよ」

「この魂が保護できただけでもいいんじゃない？」

戻る前に聖杯を俺の体に埋め込んだ

多少苦痛はあるが、魔力を流し込むには一番手っ取り早い

「じゃあ、気づかれないうちにさっさと退散するか

優奈、転移を頼む」

「はいはい、じゃっ転移！！」

そう言うと、俺たちは蒼銀の光に包まれた

Side アルフ

フェイトがあの子のところからまた傷だらけで帰って来た

「フェイト、もうあの子の言うことを聞くのはやめようよ！」

「アルフ…でも、母さんのお願いだから…」

早く帰って、また探しに行かないと…」

そう言うと、フェイトは気絶してしまった

あの子のところに行って、もうフェイトにこんな事止めさせてやる！

あの女の部屋に行き、扉をぶち破る

バガン！！

その部屋に入った瞬間、私は固まってしまった

「な、何でフェイトが……！？」

「あら、出来そこないの人形の使い魔じゃない

アリシアを見たからには殺してしまわないとね」

そう言うや否や、あの女は私に向って雷撃を放ってきた

私はそれを避けると、あの女に殴りかかるがシールドで防がれてしまふ

「くっ……このお……！」

「ふん、使い魔風情が……！」

バチバチッ！

「ぐあっ………」

雷撃を食らい、次元空間に落ちていく

どこでもいいから転移しないと………

転移が終わった直後、とうとう気絶してしまった

Side 恭介

時の庭園から帰ってくると、早速俺は聖杯に魔力を流し始めた

どんどん魔力が減っていつているのがわかる

物凄い吸収量だ……確かにこれは普通の奴なら即魔力が枯渇するだろうな

最初俺の魔力はSSあっただけど、今は鍛錬などをしているおかげでSSSを超えることができた

完全なEXではなく、SSSに近いEXなんだけどな…

30分もすると、魔力は3分の1以下になったので今日のところはこれで止める

明日になったら、解析できるだろうから今日のところは休もう

そうして俺は眠りについた

星の少女と雷の少女はぶつかり合い、自らの意思をぶつけ合う

イレギュラー
異物達は魂の解析を行い、禁じられた術を行使する

庭園は崩れ去り、一人の狂人は闇に飲まれる

11話 隠された真実（後書き）

「あとがきコゝナ」（仮）」

恭介「タイトルと内容が合っていない気がするんだ」

優奈「お兄ちゃん、それは言っちゃいけないよ？」

恭介「さて、今回のゲストは本編でほとんど出番がないルーアです」

ルーア「お久しぶりです皆さん」

優奈「みんな忘れちゃってると思うよ？」

ルーア「主！？それはいくらなんでも酷すぎます！..」

恭介「実は作者も忘れかけていたらしい」

優奈「ほらね？」

ルーア「そんな殺生な... orz」

恭介「さて、今回は時の庭園侵入編だったな」

優奈「最深部で見つけた魂が今後どう関わってくるのか」

恭介「勘のいい人は、最後の予告？つぱい部分で分るんじゃないかなあ...」

ルーア『どうせ私なんて………（ブツブツ）』

優奈「ルーア、今度甘い物奢ってあげるから機嫌直して？」

ルーア『うう、絶対ですよ』

優奈「うん、約束だから」

恭介「じゃあルーア、次回予告お願い」

ルーア『次回「12話 災厄の種」』

フェイトさんとなのはさんがぶつかり合います』

一同「それでは、次回もお楽しみに！！」

12話 災厄の種（前編）（前書き）

久しぶりの更新です

ようやく大学のテストも終わり夏休みに入ったので、できるだけ更新していきたいと思います

今回は長いので、2部に分けて投稿します

あと少しで無印編も完結、これからもよろしくお願いします

では、魔法少女リリカルなのは ～とある兄妹の転生記～ 始まります

12話 災厄の種（前編）

Side 恭介

時の庭園に侵入した翌日、アースラで魔力測定などを受けるために先日と同じ公園に来ていた

もちろん、聖杯は家に厳重に保管してある

あんなものが管理局に知れたらどうなるかわかったもんじゃないしな公園には、なのはたちが既に来てベンチに座っていた

ただ、ユーノは相変わらずフェレットもどきの姿のようだったが…

「おはよう、なのは、ユーノ」

「おはよう、恭介君」

「おはよう、恭介」

もつそろそろ、迎えが来ると思うよ

迎え？そっか、そのまま転送というわけないか…

そんなことを考えていると、こちらに私服姿のクロノがやってきた

「揃っているようだな

じゃあ転移するからこっちに寄ってくれ」

俺たちが近寄ると、クロノを中心に魔法陣が展開されて俺たちは転移した

くくアースラ　艦内くく

「ふくん、さすが戦艦だ

オーバーテクの塊だな…」

「これから二人は簡易的な魔力測定を受けてもらう
こっちだ、ついてきてくれ」

クロノが先頭に立って歩き出し、俺たちはその後についていった

Side　リンディ・ハラオウン

《艦長、なのはちゃん達が転移してきたようです》

エイミィがあの子達が来た事を通信で教えてくれる

「そう、ありがとう」

魔力測定の結果が出たらまた教えてね」

《はい、分かりました》

あの子達…なのはちゃんはおそらく管理局でも数%しかないA
Aランクは最低でもあるはず…

でも、もうひとりの子…恭介君は、クロノを軽くあしらった事も考
えるとおそらくオーバースだろう

しかも、9歳の割にかなり精神が大人っぽいし、何よりレアスキル
まである…

人造魔導師という線も調べてみたけど、それらしいプロジェクトは
出てこなかった

そして、この世界で彼のことを調べてみたけど戸籍すらなかった

まるで、この時期を狙って突然現れたように……

彼は本当に何者なんだろう……

そんな思考の海に沈んでいると、エイミーから通信が入ってきた

《艦長、検査が終了しました

今からそちらに向かいますがよろしいですか？》

「ええ、大丈夫よ

先に検査の結果を送ってちょうだい」

《分かりました》

通信を切ると、二人のデータが送られてきていた

私はその結果を読み、今後のことを考え始めた

S i d e 恭介

検査が終わると、艦長室へ案内された

どうやら今後の事などを話し合うのだそうだ

途中でエイミイさんと合流し、艦長室に向かう

「艦長、失礼します」

入ってみると、外国人が日本を表現したような勘違いな和室であった

原作見てて思ったけど、やっぱりどこか勘違いしてるよなあ…

「皆さん、どうぞ座って」

リンデイさんが座るよう促したので「失礼します」と言って座る

横を見ると、なのはと元の人間に戻ったユーノも同じようにして座った

「では、まず検査の結果からお話します

まずはなのはさんですね」

そう言って、俺たちの目の前にディスプレイが展開された

「なのはさんの魔力ランクは、AAAランクですね

推定ですけど、だいたいフェイトさんと同じくらいの魔力ですね」

「クロノ君より多いね」

「魔力だけ多くても、それを扱う技術がなければ宝の持ち腐れだ
魔力だけが全てじゃないよ」

「クロノ、今はそれは置いておきなさい

次に、恭介君ね」

魔力はどれくらい分ってるが、他に何が出てくるかわかったもん
じゃないからな

一応、上には報告しないように約束してもらってるしリンディさん
個人は信用できるからいいんだけど、将来管理局に入るとしたらこ
れに対する言い訳考えとかなくちやならないから、結局はちょうど
良かったけどな…

「恭介君の魔力ランクは……計測不能よ……」

「……は????」「」

おお、なのは・ユーノ・クロのが一斉に八モったな

特にクロノが慌てふためいている……これはある意味珍しいな

「恭介、君は本当に人間なのか？」

失礼なことを聞いてくるクロノ

「失礼な、俺はれっきとした人間だ………たぶん」

最近、人外っぽいことばかりしてるから自信なくなってきた

性転換とか聖杯とか……………

大体、転生してチートになった時点で人外認定されたようなもんだけどな

「とにかく、普通はリミッターをかけないと暴走の恐れがあるんだけど、恭介君はちゃんと制御できているようだし、恭介君も大丈夫でしょ？」

「はい、大丈夫ですよ」

「じゃあ、二人は出来ればこれからのジュエルシード探索の間はアースラに居て欲しいんだけど…」

恭介君もなのはさんも大丈夫？」

「俺は大丈夫ですよ」

ああ、別に家族の心配はいりませんので

《なのは、俺に妹がいること内緒な》」

「私は…お父さんとお母さんに相談してみないと……………」

《分かったけど、なんで？》」

「恭介君にご家族はおられないのかしら？」

「はい、俺が小さい頃色々あって……………」

アースラに泊まるのは今日からでも大丈夫ですよ

《面倒なことになるから今は内緒にしといてくれ

そのうち話すから」

「では、なのはさんはご家族の方と相談できたらまた連絡してもらっていいかしら？」

あと恭介君は、一度準備してきてからまた来てもらえる？」

「はい、わかりました！」

《ちゃんといつかお話ししてもらおうからね！》

なんかお話フラグが立ってしまった……

俺と訓練してるから、原作より凶悪になってるんだよね……主に砲撃が……

「俺は準備ができたなら、また今日と同じ公園に来ます」

「分かったわ

ではクロノ、恭介君となのはさんを転送ポートまで送って行ってあげて」

「はい艦長」

そうして、俺たちはアースラを後にした

俺は家に戻ると、嚴重に保管しておいた聖杯を取り出すと、再び魔力を込め始めた

5分後、魔力の供給をやめて聖杯の中の魂の様子を見ると、だいぶ回復していた

これなら優奈に解析を頼めそうだな

《優奈、例の魂がだいぶ回復したから解析頼めるか？

俺は今日からアースラの方に行かなくちゃならないし、また帰ってきたときに結果を教えてくれ》

《分かったよ、お兄ちゃん

向こうでも頑張ってるね》

《ああ、ありがとう》

そう優奈に念話を入れると、また聖杯を元に戻して準備をし公園に向かった

公園にはすでにクロノがいた

「予想より早かったな」

「まあ、持ってくものなんて特にないしね」

「じゃあ行こうか

こっちに寄ってくれ」

「はいはい、分かったよ」

くくアースラ 艦内くく

転送ポートを出るとこれから生活する部屋に案内してもらう

「君の部屋はここだ

艦内は一応自由にしてもらって構わないよ

何かあったらブリッジまで来るといい

僕か艦長がいるはずだからね」

「わかった、ありがとう」

「じゃあ僕はこれで」

そう言うとクロノは部屋を出て行った

クロノが部屋を出ていくのを確認すると、俺はドアにロックをして部屋に結界を張る準備を始めた

結界と言っても、Fateの方の結界だな

あれはこちらの技術じゃないから感知できないと思うし、けっこう便利なんだよな

結界をこの部屋より一回り大きく、特にドア側を大きく張る

感知用も兼ねてるから、誰が来たかもわかるようになってる

感知用結界の内側には魔力阻害用の認識阻害結界をさらに張る

これは、認識阻害結界を魔力のみ阻害するように改造したものだ

でも、完全に阻害すると気付かれる恐れがあるので、少しは通すようにしてあるけど…

よしっ、結界張り完了!!

明日からの探索も頑張りますか…

S i d e 優奈

お兄ちゃんは今からアースラの方に泊まるようだ

あ〜、はやてちゃんの言い訳ど〜しよ〜

それと、早めに聖杯にある魂を解析しないとイケないし…

うん！まずは解析の方から済ませてしまおう!!

嚴重に保管してあるって言っても、引き出しの中に入れてるだけなんだよね〜

なんでも、お兄ちゃんが認めた人以外の方が引出しを開けると大変なことになるって言ってたんだけど……

大変なことってなんだろ??

とにかく、早く解析してみないとね

「ルアー、ユニゾンお願い」

『主、やっと出番ですか…』

この時をどれ程待ち望んでいたのか……（ブツブツ）

「ルーア、愚痴は後でちゃんと聞くから今はユニゾンして？」

『分かりました』

ユニゾン・イン』

ルーアが光になって私に吸い込まれていく

「じゃあ行くよ、ルーア」

『サポートはお任せください、主』

お兄ちゃんは解析だけでいいといったけど、私はそんなのは嫌だ

だから……完全に器まで直して見せるっ！！

完全に直すとなると、時間との勝負になるのだ

「よし、行くよっ！！」

接続 リンク アカシックレコード
世界の記憶」

「参照 アクセス 欠けた魂魄

まずは第一段階！！」

第一段階は不完全な魂の修復作業、これが失敗すればすべてが終わる

『第一段階、世界の記憶から不完全な魂の修復を行います……』

…作業完了』

よしっ、何とかクリア！

「次っ！第二段階に移行！」

第二段階は魂の解析、膨大な情報量を誇る魂を解析し魂を入れる器の情報を探す

『第二段階、魂の解析を行います……………作業完了』

「はぁ…はぁ…、まだまだっ！」

第三段階に移行！」

第三段階は先ほどの情報をもとに器の復元をする

ここからは私の独断だ、お兄ちゃんに怒られるかもしれないけど頑張らないと！！

『第三段階、器の復元を行います……………作業完了』

私の前に魔方阵が展開され、光が収束し体の形になっていく

「あと…少し……………」

第…四段…階に…移…行……………」

脳を酷使しすぎて、意識が朦朧としてきた

でも、ここで意識を失うわけにはいかないんだっ！

最終段階は魂の定着、ここで拒否反応なんか出たらこれまでの作業が水の泡だ

『最終段階、器に魂の定着を行います……………
作業完了』

よしっ、拒否反応は出なかった！！

「
接続切断！！」
リンクカット

ルーアとのユニゾンを解くと、一気に疲れが出てきてベットに倒れこんだ

「ルー…ア…成…功？」

『はい、お疲れ様でした、主
ゆっくりお休みください』

その声を聴いた途端、私は深い眠りについた

12話 災厄の種（前編）（後書き）

「あとがきコゝナ」（仮）」

恭介「さて、久しぶりの投稿だな」

優奈「作者によれば、大学がテストで（ry：って言ってたよ」

恭介「ようやく無印編も佳境に入ってきたな」

優奈「今回は散々感想でも言われた魂がとうとう復元されたね」

恭介「正体はまだ出てこなかったけどな」

優奈「あと、活動報告には書いてたけど50000PV& 10000ユニーク突破したよ」

恭介「作者はこれを記念して、またリクエストがあれば番外編かなければ拡張版あとがきコゝナをやるつもりだぞうだ」

優奈「あと、オリキャラの募集もしてるよ」

応募は活動報告かメッセージに書いて送ってきてね

期限は無印編終了までだよ」

恭介「では、次回『13話 災厄の種（後編）』」

二人「次回もお楽しみに！！」

13話 災厄の種（後編）（前書き）

さて、長らくお待たせしました

無印編終盤に向けて、さらに更新速度が上がるようにしていきます
あと、今回はクロノが空気です orz

それでは、魔法少女リリカルなのは ～とある兄妹の転生記～ 始まります

13話 災厄の種（後編）

Side 恭介

俺がアースラに乗艦して1週間が過ぎた

地上でのジュエルシード探索はあまり捗っておらず、発見しても先回りされてフェイトに掠め取られて行く事が数回…

クロノが意地になって、何とか確保したジュエルシードもあるけど、あまり多くない

なのはは、何とか親の許可を得られたらしく、俺がアースラに乗艦した翌日に乗り込むことになった

ただ、あまり学校は休めないの地上の探索が滞っている今は、俺とリンディさんに説得されて学校に行っている

管理局側は、地上の探索ではこれ以上の成果は望めないと思い海の方にも探索範囲を広げるようだ

あと、フェイトと何回か探索で遭遇しているが、アルフの姿が見えない

別行動でもしているのかな？とそんな事を考えていたとき、なのはから連絡が入った

Side なのは

お父さんとお母さんの説得も何とか成功して、アースラに乗ることになったんだけど、最近は探索の成果が出てない

恭介君たちが言うには、もう地上には無いかも知れないと言ってただから今日は、別のところに探索に行こうと思ってただんだけど、恭介君とリンディさんあまり学校は休まない方がいいと言われて、久しぶりに学校に登校することになったの

「アリサちゃん、すずかちゃん、おはよう!」

「おはよう、なのは

あんた今まで何してたのよ!」

「ふえ!? えっと、その……」

「まあまあ、アリサちゃん落ち着いて?

後でゆっくり聞き出せばいいんだし」

すずかちゃん、なんだか笑顔が黒い気がするの…

「まあいいわ

後でちゃんと白状してもらうんだからね!」

どうしよう……恭介君にあとで相談しようかな…

「あ、そういえばすずか、なのは、今日家に来ない?

最近、怪我してる大型犬を拾ったの」

「アリサちゃん、また犬を拾ったんだ」

「なにによらずか、あんただってよく猫拾ってくるじゃない
お互い様よ」

「じゃあ、今日は用事もないし行くよ！」

あと、その犬見せてもらってもいい？」

「別にいいけど……」

授業が終わり放課後、私たちはアリサちゃんの家にお邪魔することになった

「この間拾った犬はこっちよ」

この犬、拾った時には結構大きな怪我してて大変だったのよ？
そんな事を話しながら、アリサちゃんに拾った犬のところに案内してもらった

「えっ！？この子……！！」

私が近づくと、犬は唸り声をあげて檻の隅の方に移動する

「何？なのは、この子知ってるの？」

「うん、ちょっと……」

アリサちゃん達は先に行っててくれる？」

「別にいいけど、怪我とかしないようにね？」

「うん、分かってるよ」

そう言っつて、アリサちゃん達を先に行ってもらうと、恭介君に連絡して、檻の中にいる犬　アルフさんに声をかけた

なぜかモニターに出た恭介君は最初驚いたような顔をしてたけどすぐに元の顔に戻った

「アルフさん、フェイトちゃんはどうしたんですか？」

「ふん……管理局の奴らなんかに話すことはないね」

《どうせ、大方あいつにやられたんだろ》

恭介君がモニター越しにアルフさんにそう言った

「なっ……！？お前はあの糞婆を知ってるのかい……！」

《知ってるよ》

だからこそ管理局じゃない、俺に協力してほしい》

「フェイトを助けてくれるなら……」

それなら協力してやるさ」

「恭介君、あいつつて？」

《フェイトの母親だよ》

「あんな奴、フェイトの母親なんかじゃないさ！」

《アルフ、今はその話はいい

使い魔の精神リンクは切られてないんだろ？

それで居場所を特定できないのか？》

「まあ、出来る事は出来るけど精度はあまり良くないよ」

《それでいい

大体の場所を教えてください》

「今は……海の方だね」

《海だとっ！？

やばい、なのはアルフと一緒に今すぐ海の方に向かえ！！》

「う、うん…分ったよ

アルフさん、行こう！」

「分ったよ！」

Side 恭介

なのはがアリサの所でアルフと出会ったようだ

おかしい……まだ、海の方のジュエルシールドは回収していないはずなのに、何故もうアルフが怪我をしているんだ？

それよりも、早く俺も海の方に行かないとかなり危ないはずだ

原作でも、フェイトとアルフが一緒でも歯が立たなかったのにフェイトだけだったらどうなるか分ったもんじゃない

「アルト、セットアップ」

『セットアップ』

優奈の所に行くのが遅れそうだなと思いながら、俺はアルトをセットアップし、急いでフェイトのもとに向かうことにした

海上では、フェイトが一人で結界を張り呪文を唱えていた

「……アルカス・クルタス・エイギアス……

煌めきたる天神よ

今導きのもと、降りきたれ

バルエル・ザルエル・ブラウゼル……」

金色の魔法陣がフェイトを中心にどんどん広がっていく

「撃つは雷、響くは轟雷

アルカス・クルタス・エイギアス……！」

サンダーフォール……！」

フェイトの放った広域魔法が海中に打ち込まれ、6つのジュエルシードが一気に暴走を始める

「行くよ、バルディッシュ」

『イエス サー』

しかし、魔力が足りないのかかなり危ない機動で封印しようとする
がなかなか封印できない

俺はチューンバインドで竜巻を固定した

「フェイト!!」

「フェイトちゃん!

一人でなんか無茶だよ!!」

そこになのはとアルフもやってきた

「なのは!フェイトに魔力を分けてやってくれ!!」

アルフは俺と一緒にあの竜巻をバインドで固定してくれ」

「フェイトちゃん、二人できっちり半分こ」

レイジングハートから光の帯が、バルディッシュへと伸びていく

『パワーチャージ』

『コンプリート』

「行くよフェイトちゃん!

二人でせーの、で一気に封印!!」

後ろにフェイトをかばいながら雷切を振ると、雷が二つに割れた
しかし、その横に漂っていたジュエルシードは降ってきた雷が持つ
て行ってしまった

おそらく、物質転送でも仕込んでいたんだろう

俺の前にモニターが開き、リンディさんが画面に現れる

《恭介君、そちらの人達も連れてアースラに来てもらえないかしら
？》

「いいですけど、転送はお願いしますよ」

《では、恭介君を中心に転送するので、恭介君の周りに集まっても
らえないかしら》

リンディさんがそう言うと、みんなが俺の周りに集まってくる

「フェイトもこっちに来てもらっていいか？」

「恭介となのはがいるなら……」

《じゃあ、転送するわよ》

そうして俺たちは光に包まれ、アースラに転送された

くくアースラくく

アースラに転送されたあと、ブリッジにリンディさんのもとに向かった

「来たわね

恭介君、なのはさん御苦労さま」

「で、ジュエルシードは物質転送されたようですけど追跡はできてるんですか？」

「ええ、なんとかね

こちらにも次元跳躍魔法が来たけど、そちらに魔力を使ったのかぎりぎりシステムダウンにはならずすんだわ」

「これからどうするんです？」

「武装隊を時の庭園に派遣したから、そのうち逮捕できると思うわなのはさん、フェイトさんを別室へ

さすがに母親を逮捕されるようなところを見せるわけにはいかないわ」

その時、画面の向こう側で動きがあった

武装隊がプレシア・テストロッサを包囲し降服勧告をしているところだった

降服勧告を一笑し、プレシアは武装隊に向かって雷の魔法を放つ

「危ないっ！！！！！

エイミー、武装隊の送還を！！」

「はい!!」

ほかのオペレーターが状況を報告する

「時の庭園内部にAランク魔力反応多数!」

《そこに人形は居るわね?》

そこから語られるのは、プレシアの過去…フェイトの過去…そして…
…アリシアの存在…

「もうやめてっ!!!!」

なのはが悲痛な叫び声をあげる

《私はね、あなたの事が嫌いだったのよ!!!!》

プレシアがそういつた瞬間、フェイトが放心したように崩れ落ちた
そうして映像が切れる

「リンディさん、俺は時の庭園に行つてきます」

「1人で行く気?」

「恭介君、私も行くよ!」

「なのは達は後から来たらしい…
ただ…あいつを殴ってやらねえと気が済まないだけだ!!」

だから先に行くぞ」

「恭介君！後で絶対追いつくから！！」

なのはの言葉を背に、俺はアルトをセットアップし、転送ポートへ向かった

S i d e 優奈

あの魂を完全復元したあと、私は丸1日以上眠っていたようだ

それでもまだ、魔力は完全に回復していない

今お兄ちゃんはどうしているだろうか……

お兄ちゃんからの連絡がないのもあるけど、それより私は今重大な問題を一つ抱えている

その原因とは……

「おねーちゃん、どうしたの？」

「ううん、何でもないよ」

そう、私の腕の中にいるこの子のことだった……

13話 災厄の種（後編）（後書き）

「あとがきコゝナ」（仮）」

恭介「ようやく後編が終わったな」

優奈「今回は私の出番が少ない……」

恭介「そう言うな、クロノなんてアースラ出てきてるのに全然出番ないんだぞ？」

優奈「まあ、それよりはマシかな……」

恭介「感想では、前回優奈が頑張ったといろんな人が言ってたぞ」

優奈「えへへへへへ、お兄ちゃんも褒めて〜」

恭介「ほら、よく頑張ったな」（頭ナデナデ）

優奈「えへへへへへ〜」

恭介「優奈、次回予告だ」

次回はどうとう時の庭園突入編！」

優奈「そして、あの子の正体とは！」

二人「次回『14話 時の庭園突入！』」

恭介「毎回アクセスしてくださる皆様、感想を書いて下さった皆様、

本当にありがとうございます」

優奈「質問・感想などお待ちしております！」

二人「それでは、次回もお楽しみに!!」

14話 時の庭園突入！（前書き）

どうも、tkです

なんだかんだ言って結局4日も空いてしまいました

今回は少し短めですが微妙ですけど、これからもよろしくお願ひします

それでは、魔法少女リリカルなのは ～とある兄妹の転生記～ 始まります

14話 時の庭園突入！

Side 恭介

転送ポートから時の庭園に転移し、俺はプレシアのいる最深部を指していた

そこらじゅうに虚数空間が広がっているが、それを無視して飛び越え、時には迎撃してきた傀儡兵を虚数空間に突き落としながら進んでいくが、倒しても倒してもどんどん傀儡兵が出てくる

俺は傀儡兵を王の財宝から破魔の紅薔薇ゲート・オブ・バビロンを取り出し、コアを破壊しながら最小限の動きで倒していくが、如何せん数が多い

「ああくそつ！！」

虫みたいにうじゃうじゃと！！！！

アルト！！」

破魔の紅薔薇をしまい、アルトを横薙ぎに振るとそこから薄い漆黒の衝撃波が出てくる

「黒龍：一閃！！」

アルトから放った漆黒の衝撃波が、前方に固まって道を塞いでいた傀儡兵達に当たり一斉に大きな爆発を起こす

傀儡兵が倒れて塞いでいた道が開き、俺はその中をまた突っ走っていく

「アルト、砲撃で壁抜きするぞ！」

『ダークブレイカー』

立ちふさがる壁をダークブレイカーで破壊し、プレシアがいるであろう部屋に突入する

そこには、プレシア・テストロッサとその横にはポッドに入ったアリシアがいた

「あら、あなたはあの人形が言つてた奴ね

今更こんなところに何しに来たの？」

「あんたのその考えが気に入らないから殴つてでも変えさせるために来たんだよ！！」

そう言うや否や、俺はプレシアの方に砲撃を放つがプレシアはそれを雷撃で相殺する

今プレシアは11個のジュエルシードを完全に制御している

だから、膨大な魔力のせいで体の方が持たないんだろが、それでも原作より厄介な状態になっている

このままでいけばあと30分と持たず時の庭園は虚数空間に飲み込まれてしまう

「いい加減目を覚ませよ！

アリシアは死んだ、その事実をいい加減受け入れろ！！

フェイトをアリシアの身代わりと見ずに一人の娘として認める

！！」

「嫌よ!!」

あんたに何がわかるのよ!

その上、あの人形を娘と思えですって!?!」

「そっだ!

いくらクローンだろうが、アリシアの遺伝子を使っているということはお前の娘だろうが!!」

フェイトを娘として否定するということは、アリシアも否定するということなんだぞ!!」

「そんな筈はないわ!!!!」

そう言い、プレシアはジュエルシードの魔力を使いさらに次元振を大きくする

更に、そこらじゅうに雷撃の魔法が放たれる

「私は、アルハザードに行き失われた時間を取り戻すのよ!」

「この分からず屋め!!!!」

俺は雷切を出して雷を切り裂きながら、プレシアの方に進んでいき殴りつける

「いい、加減、に、し、ろっ!!!!」

殴られたプレシアは、吹っ飛んで壁にぶつかる

「はははっ、もう遅いわよ…」

もう、発動したジュエルシールドは止められない
あなたも虚数空間の海に沈むといいわ……」

その時、俺の空けた穴からクロノたちがやってきた

「恭介！艦長がディストーションシールドで次元振を抑えているが
崩壊も時間の問題だ！

早く脱出しろ！！」

「その前に、フェイトはプレシアに何か言うことはないのか？」

「母さん……」

「じほっ、ごほっ……」

今更何しに来たの」

「母さん、貴女に言いたいことがあってきました」

「今更あなたの言葉なんて聞きたくもないわ

さっさとどこかに行ってしまうなさい！」

「母さん、貴女は私を娘と認めてくれないかもしれないけど、私は
貴女の娘です」

「だ、から……なんだと言うの？」

「だから、母さんが言ってくれば私は貴女を守り抜きます
世界中が敵でも守り抜きます」

「ふん……」

アースラに戻った俺たちは、医療室で治療を受けていた

特に怪我がひどかったのはクロノ

なんでも俺の後をつけてきたらしいが、俺は前の敵しか倒していなかったのだからかなりの数の傀儡兵が一斉に襲い掛かってきたらしい

それでも何とかやってのけるのは、執務官としての意地かな

フェイトは罪には問われず、保護観察になるようだがそれでも裁判があるので半年くらいはお別れだと言っていた

あとは、事後処理として色々と時の庭園内での出来事を聞かれた

なんでも次元振の影響でサーチャーが全滅して、中の様子が全く分からなかったそうだ

俺の能力のこと等、めんどくさいことはぼかして伝えた

フェイトは立ち直るかどうかわからなかったが、結局原作のように立ち直った

最後にかけてもらった言葉が効いたらしい

ジュエルシード事件、またの名をP・T事件はプレシア・テスタロッサこうして幕を閉じた

事件が終わり、事情聴取？も済んだので、俺となのはアースラを降りた

なのはフェイトと会えないと寂しそうにしていたけど、本局に向かう直前に少しだけ会えると聞いて喜んでいた

さて、久しぶりの八神家、これからはここを舞台に再び事件が起こるんだと考える

今回は結局原作通り、プレシアを助けることはできなかった

今度こそ、何としてでも闇の書…いや、夜天の書を呪縛から解放したい

もう、こんな悔しいのはごめんだ……

こんな顔してたら優奈たちに心配されるな……

俺は元気を振り絞り、八神家の玄関を開けた

「ただいま！」

そうして、俺となのは再び日常に戻っていったが、この海鳴の地で今度は二人が対立することになるとは、なのは知りもしなかった

S i d e 優奈

魂のかけらから復活させたこの子はどんどん知識を吸収していつて

まるでそれが義務のように……まるでそれが呼吸すると同等のよう
に……

正直、私が言うのもなんだけどこの子は異常だ

いまや、この子が知らないことを探す方が難しかった

私の能力はこういっのに向いているけど、さすがに限度がある

お兄ちゃんが早く帰ってきてほしいよ

はやてちゃんにも紹介して、今は颯ちゃんと遊んでるみたい

はやてちゃんもお姉さんぶってて可愛かったなあ……

うん？この子の名前？

この子はね、　　って言うんだ

「お姉ちゃん」

あ、　　が呼んでるみたい

お兄ちゃんも早く帰ってきて〜

「ただいま！」

ようやく待ちに待ったお兄ちゃんが帰ってきてくれたようだ

さて、 の相談をしなきゃ……

私は玄関に向かい、帰ってきたお兄ちゃんに笑顔で出迎えた

「お帰りなさい！」

S i d e ? ? ? ? ?

「闇の書の主のところに異物が紛れ込んでイレギュラーいるようです」

「計画に支障はないのか？」

「兄妹の兄の方は、PT事件にも協力しているようですが、妹の方は闇の書の主とほぼ一緒に行動しているようです

兄の方は管理局を信用していないらしく、計画が挫折されると
いう事はあまりないかと

妹の方は兄とは違い、戦闘もしていないので能力が未知数です」

「分かった、計画の邪魔になりそうな場合はすぐに始末しろ

兄妹の監視・警戒を怠ることがないよう」

「分かっています」

「氷杖の方はどうだ？」

「こちらは順調に進んでおります

計画には十分に間に合う予定です」

「では二人とも、闇の書の主の監視につきなさい」

「はい」

「再び…あの惨劇を繰り返すことがないように、今度こそ……」

14話 時の庭園突入！（後書き）

「あとがきコゝナ」（仮）」

恭介「というわけで、今回が一応無印編の最終話一歩手前です」

優奈「不完全燃焼にもほどがあるよ……」

恭介「一応時間があれば修正するかも……です」

優奈「次回は？」

恭介「最終話、いろいろ明かすつもりらしい

明かすことが殆どない気もするけどな」

優奈「じゃあ、次回予告！

次回「15話 名前を呼んで」

お楽しみに！！」

恭介「ちなみに無印編が終わったら番外編特集！！

コラボしたり、色々したりと1話では絶対に終わらないらしい」

優奈「まだまだ番外編のリクエスト募集中ですよ」

あと、活動報告に書いていたオリキャラの募集は次回投稿時までとします」

二人「それでは、次回もお楽しみに！！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8681/>

魔法少女リリカルなのは ~とある兄妹の転生記~

2010年10月13日15時25分発行